
とある科学の水使い

神滅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の水使い

【Nコード】

N9348M

【作者名】

神滅

【あらすじ】

流雅 翠は中学の頃の友達、上条 当麻に出会った。
珍しい能力を持つ翠はつまらない学校生活を送りながら、楽しい生活を求めた。ある日、その願いは叶えられ、彼女に出会う……。。

原作にそって行く物語。

終わり方は考えていないので中度半端に終わる可能性大！

不定期更新！

それでも良いよってかたはどうぞ読んでください！w^

設定（前書き）

途中でいろいろ継ぎ足すかも・・・

設定

基本的にとある科学ルート

主人公

名前 流雅 翠

能力 水使い（ウォーターテイマー） 4レベル

近くにある。水（液体）を操ることができる。
高レベルになると自分で水（純水）を作ることが可能になった

容姿

水色の髪、アスラクラインの真日羽 愁と似た髪と顔 身長165

cm

痩せ型

身体能力

スタミナとスピードは当麻よりすこし劣る

性格

物覚えが悪い

お人よし

気まぐれにあきやすい

趣味は読書

料理は全くできない

学校の名前すら覚えていない。
学校生活を嫌っている。

不幸は伝染する

突然だが……。

皆さんは女子中学生に追いかけてどう思いますか？
女子中学生を追いかけるのなら立派な犯罪ですが……。
女子中学生に追いかけられたらどうなんでしょう？

高校1年生の素朴な悩み……。

～夏休み前日～

俺は学校帰りに昔の友人を見つけた。

『お、当麻～』

「翠？ 翠か？」

『懐かしいな、今どこの高校行ってんだ？』

当麻とは中学3年の時に知り合った。

そして、違う学校に行くようになった。

仲は結構良かった。

『あー……』

学校の名前を覚えていないなんていえない……。

『名もない学校だよ』

「名前覚えてないだけとか言わないよね翠さん」

『き、気のせいだよ……』

目線をそらす。

当麻にはばれている……。

『まあ、立ち話もなんだしファミレス行こうぜ』

「いいぜ」

そういつて、ファミレスに行く事になった。

注文をとって当麻としゃべってる。

当麻は学校でうまく言っているらしい。

不幸な体質は変わらないが……。

「お前の学校はどうなんだ？」

『面白くないよ……』

俺の行っている学校は面白くない。

能力のレベルが高い奴ばかりが集まっていてみんなが一生懸命に勉強、休み時間も勉強。

面白くない。誰も話そうとしない。誰もかわろうとしない。

しかし、学費免除されているので学校に行かないといけない……。

『くだらない学校さ』

「そうか……。翠がいうんだから本当なんだな」

暗くなってしまった。

そのとき、外で女の子が男性に囲まれてるのを見つけた。

『当麻ここにいろ』

「ん？」

(こいつはお人よしだが……。レベル0だからあんまり面倒ごとにかかわらせたくない……)

俺はファミレスを出て囲まれている床に行く。

「君いゝ、お兄さんたちと遊ぼうぜえ？」

「たっぷり可愛がつてあげるからさあ？」

何時の時代だ……。とか突っ込みたいが我慢して……

『ごめん。遅れた』

嫌なことに巻き込まれないための対策1

「知り合いの振りをして女の子を救出」

(これならいける！)

頭の中で考えた作戦を実行に移してみる。

「誰だこいつ」

「何だなんだ？」

囲んでいる奴も俺の登場に動揺してる。

俺が少女の手を掴んでその場を離れようとする。

(これで完璧だ……)

「誰よあんた？」

(はあ?)

助け出そうとした少女は俺の作戦を台無しにしてくれました。

「なんだよこいつ」

「ヒーロー面して出てきたんだろうが、そんなに世界は甘くないんだよガキ」

俺を囲んで睨みつけてくる不良。

『大体さ……。自分より小さい子しか狙えないんですか?』

「あ?なめてんのか!」

俺の発言が気に食わないのか怒り出したよ……。

『すこし……。』

小声で言う。

「あ?」

『頭冷やせ!』

近くにいた奴の頭の上に水をつくり頭からかける。

「冷てー!」

夏とは言え夜に冷水を浴びるのは寒い。

『あんな、小さい子を大人数で囲んで何が楽しいんだ？そんなに相手してほしかつたら大人数じゃなく一人一人にするとか暴力的な行動をしないとかにしろ』

俺はそう言っただけだ。

「てめー！」

他の奴らが殴りかかろうとした時。

「小さいとか子供とかうっさいわー！」

少女が怒った……。

バリ！

「わあー！」

小さい子供扱いが不満な少女……。いや、彼女は電撃を放つ。不良たちは電撃を受けて倒れた。

俺は水（純水）の盾を作り何とか凌いだ。

『びつくりした……』

純水は電気を通さないって言うても良いくらいの物だ。なので、すごい電流もダメージを受けないという。

「な、何で平気なのよ!？」

（攻撃が終わった時に倒れとけばよかった……）

後悔しても仕方ない……。

『やめようぜ。俺には電気は通用しない』

「何よ。あんた何者！」

『流雅 翠……。何名乗ってんだ俺！』

(言わずに逃げればそこで終わりだったのに)

「覚えたわよ。私と勝負しなさい！」

彼女の宣戦布告みたいなものを無視して俺はダツシユで逃げた。

そして、ファミレスに逃げ込んだ。幸い逃げたところを見られていない。

「おかえり。どこいったんだ？」

当麻がのんきな声で聞いてきた。

『不幸が伝染してただけだ……。』

疲れきった俺は注文した食べ物食べて。当麻に住所やメールアドレスを交換し解散した。

不幸は伝染する（後書き）

応援お願いします！

退屈な学校

当麻に久々にあってから一週間たった。
俺の学校は夏休みに入ったが・・・。
能力の定期健診で学校に出た。

「流雅 翠君。次お願いします」

俺の出番が来る。

検診内容は10リットルの水槽に水を入れることだ。
速さとかいろいろな物を計測するらしい。

「始めてください」

先生の合図によって始める。
水槽の中に水を作り出す。

すぐに10リットルはたまった。

ピッピ

溜まる時間 0.5秒

LEVEL・・・4レベル

「前回と何も変わっていないな」

先生が冷たい目で言う。

『これ以上はつらいんですよ』

俺が言い返しても先生は冷たい目で言った

「苦勞をして強くなれ」

『学校の為にですか？』

「もちろんだ」

当然のように先生言った。

(くだらない……。学校の名を上げるためなんて)

『じゃ、試験が終わったんでこれで』

俺は学校を出る。

(くだらない日常……。先生の言うことはいつも、真面目で学校のことを言ってる)

イライラしながら俺は下校する。

この学校は能力を上げたい人を集めている。

そして、珍しい能力者を集めていたので俺に声がかかった。

俺の家は貧乏だった。なので、この学校の誘いが良かった。

『私達の学校に入学するなら、学費の免除しよう』

親達に苦勞をかけないために俺は入学をした。

高校に進まないって道があったが親は

「高校くらいに出ないとこの先やっていけない」ってことだ……。。

俺はコンビニによって立ち読みをすることにした。

そして、本に手を伸ばすと……。。

他の手が伸びてきて

「あ」

同じ本を狙っていたのは知り合いだった……。
そう、電気エレクトロマスター使いの彼女だ……。

「あんたは……。」

『電気使い……!?!?』

「私には御坂美琴って名前があるのよ!」

逆切れだ……。

『名前を名乗っていない奴が何言ってるんだ……』

「逃げたあんたが何言ってるのよ!」

怒っている俺以上に怒っていらっしやる……。

(面倒だ……)

心の中でその一言だけが思い浮かんだ。

「勝負しなさい!勝負」

『やめておけて……俺の本気出すと、人間じゃ勝てない』

俺の本気は……。まず、人間が勝てるようなもんじゃない。

俺の能力は純水を作れて、いろんな液体を操ることもできる。

それだけだ。だがそれだけのことができる。

「やってみなきや解らないでしょ!」

『解ったよ……。逃げて追いかけられても面倒だ……』

「それで良いのよ」

『ただし、川辺でやるぞ、迷惑にならないようにな』

「いいわ」

思えば・・・。御坂のレベルはいくつなのだろうか。

水VS電撃

そして、近くの川辺に来た。

『ここでいいか?』

「いいわよ!」

『やるなら、罰ゲームありにしようぜ』

「すごい自信ね。良いわよ。どんな罰よ」

(罰ゲームとか言ったが何も考えてなかった・・・)

『なら、晩飯をおごってくれ』

「それだけで良いんだ? 私が勝ったらあんたは土下座しながら誤りなさい」

『いいよ。ルールはこうだ。どんな攻撃でも良いから当てた方が勝ち』

「いいわ、覚悟しなさいよ!」

『じゃ、このコインが川に落ちたらスタートで』

俺はゲームセンターのコインを一枚取り出し斜めに向けて投げる。

コインは高く飛んで落ちてきた。

川に落ちて波紋を描く。

その瞬間に戦いは始まった。

いきなり電撃の槍が飛んでくる。

俺は水を作り出し盾にして身を守る。

純水の水なので電気のはしは水に当たって消えた。

電撃が効かないのを解ったのか電撃を撃つのをやめる。

(何をするつもりだ?)

相手の一手を考えていると地面から黒い物が出てきた。黒いものは御坂の手に集まって剣のような形になった。

『電撃が無理だからって、武器かよ』

「能力で造った物だもん」

そのとき偶然にも葉っぱが黒い物に当たった。

ビリ

(は?)

葉っぱは真つ二つに切られていた……。

(これ、ミスったら死ぬだろ……)

「砂鉄が振動してチェーンソーみたいになってるから当たったら怪我するかもね」

『怪我ですんだら俺はすげーよ!』

御坂は剣を振り回す。

俺は純水で何とかなるか考えるが、砂鉄っといっていたので無駄だと思っ避けすることに専念する。

「逃げても無駄よ!」

御坂が持っていた剣が延びた。

(俺を狙っている……)

避けることができないのはなんとなく解った。

俺は右手の親指、人差し指と中指を伸ばし御坂の手の近くの砂鉄に向ける。

そして、放つ！

俺の指から一本の水が出る。

その水は高圧力で飛ばされる。

俺の水は砂鉄を貫いた。

「な!？」

御坂は驚いて能力を切る。

その時、俺の腕に向っていた砂鉄が無くなり、風に流されていく。

俺はわずかな瞬間を見逃さない。

川の水を少し操り空中にある砂鉄川に流す。

『これで、この辺の砂鉄はなくなったぞ』

「・・・」

(これで相手の打つ手はなくなったか?)

御坂はポケットの中からコインを取り出す。

それを弾いて高く打ち上げる。

何のつもりだろうツと思っただが御坂の髪の毛の周りに青い火花が散っているのを見て考えは変わった。

その時、コインが落ちてきてそれを弾くと同時に御坂が再び弾くと

コインがすごい速度で飛んでくる。

俺は瞬時に純水の分厚い盾を造る。

シューー！

どんどん蒸発していく。

(破られる!)

死ぬ覚悟までしたが、コインは俺の作った水の中で落ちた。

(思えば電気がなければタダの熱いコインか・・・)

「な・・・! ?」

『相性が悪かったな・・・』

(結構ギリギリだったが・・・)

俺は再び指を伸ばし今度は御坂を狙う。

『お前も殺す気で来たんだろ? なら、お前も覚悟しろよ』

ビクッと反応し御坂は両手で顔を守る。

(・・・)

俺は圧力を調整して水鉄砲程度の威力の水を御坂の腕にかけた。

『はい、俺の勝ち』

「は?」

『ルールはどんな攻撃でもだ』

「・・・」

『反論は?』

「ない・・・」

その後、晩飯をおごってもらった。

水VS電撃（後書き）

連日で投稿は今日で終了。
終わり方があっけなかったかな？

虚空爆破事件

俺は夏休みを満喫するために本屋に向った。

(俺の魂の休み場……)

俺は本屋に行くだけでも幸せだった。

いつもと同じように文庫物の置いている棚を見る。

どれを買おうか悩むこと15分

まだ、俺は悩んでいた……。

その時、

「ジャケット風紀委員です。この場から早急に非難してください!!」

そんな声が聞こえたが……。隣の店だろうつと気にしなかった。

二つの文庫を見つめる俺。

「爆弾が爆発する前兆があり。この店に爆弾が仕掛けられたと思われます」

隣の店だ隣の……。

その時、肩に手が置かれた。

「あ……この場所は危険なので逃げてください」

頭に花飾りをつけた少女がそんなことを言った。

『マジスカ……』

俺は現実を受け止めるしかなかった。

俺は外に向う。

その時、後ろにあった蛇の人形が……。

(これは……。虚空爆破!?)
クラビトン

これが爆弾だ……。

「離れてください」

俺の身を守るように少女が前にでた。

俺は能力を使う水を作り出し蛇を包みこみ。何十にも水の盾を張る。

(無理だ……。こんなもんじゃ爆発を耐えられない!)

蛇の人形の半分が消えている。

(この店いっぱい水を作れば爆発で怪我はしないか……)

水を大量に生成する。

生成した水は蛇の周りに集めていく。本はびしょ濡れだが、命が助
かれば何とか許してもらえるだろ。

「え!?!」

ジャッジメント

風紀委員の少女は驚く。

蛇の人魚は完全に形をなくす。

(もう、爆発する……)

大量の水を生成して体も限界に近い。

店の4分の1が水に埋まった。

頭が痛い……。

能力の使いすぎだ……。

ドッゴオン!

蛇の人形だったものが爆発する。

水が爆発する。

爆風と水が飛んでいく。

「キヤ！」 『ツク！』

そして、俺達は吹き飛ばされた。
水浸しになった床を転がる。

『いててて・・・』

俺は肩やら足やらが痛めた。

「大丈夫ですか？」

花飾りの少女が問う。

『あなたの方が大丈夫じゃないんじゃないのか？』

「私は大丈夫ですから」

『俺は慣れてますから気にしないでください』

びしょ濡れになった相手を見るのにはつらい。

『それじゃ、自分はこれで』

つと立ち去ろうとしたらジャッジメント風紀委員の仲間^{ジャッジメント}に捕まる。

「ちょっと事情を聞かせてもらおうよ」

『へっ。』

それからたつぷり2時間の事情徴収（主に本ばかり見てたので何も解らないから怪しまれて長引く）が続いた。

俺は、当麻の不幸が伝染したのではないか本気で考え始めた。

虚空爆破事件（後書き）

爆発事件の店を本屋つと設定してつくりました。

爆発を水で和らげれないとか突っ込みがききそうですが

見過ごしてください>|_|<

こんな書き手でごめんなさい；w；

楽しい日常の姿

俺是最寄りの本屋が爆発や水浸しで休業になってしまったので俺は遠いがデパートに向う。

その通り道で俺は本当に当麻の不幸が移ったのかもう一度悩まされる。

目の前にいるのは常盤台の超能力者の御坂……。

(ばれないように遠回りしよう……)

俺が横道に行こうとしたとき。

「あれ……。あなたはあの時の！」

その横道に頭に花飾りをつけた風紀委員ジャッジメントがいた……。

『あ……』

「やっぱりそうだ」

近づいてくる風紀委員ジャッジメントの少女とその横にいる友達らしき人。逃げようっと思いはしたが諦めた……。

「あの時はありがとうございました」

近づいてきて早々に頭を下げる。

『あ……。成り行きだよ成り行き……。だから、気にしないでね』

そう言って、離れようとするさらさら厄介なことになった。

「あんだ！」

聞き覚えのありすぎる怒鳴り声。

「初春ついはるさんになにやってんのよー！」

予想道理の台詞。

『ねえ……。泣いて良い……。？』

俺の心は折れてました……。

それから、初春と呼べられた女子が御坂に俺のことと友達に御坂のことを教える。

その友達は佐天さてん涙子なみこと自己紹介をしていた。御坂に。

『さて、俺はこれで失礼……』

「ちよつとまちなさいよ」

御坂に止められる……。

「暇なら一緒に来なさいよ。初春が世話になったようだし。何かおごって上げる」

『……。』

ってことで俺は御坂達に同行した。

もちろん、俺も自己紹介をした。

そして、途中で寄った場所で板チョコをおごってもらい。少しずつたべて幸せになる。

（あー。やっぱり、板チョコっておいしい。幸せだ〜）

「なんか、あんた……。急に変わったわね」

『ああ。幸せ』

「なんだか……。流雅さんって子供ですね……。」

『いやいや、好きな物を無理に我慢するのが大人なら俺は何時までもガキでいいんだ』

「なんだか、あんたは自由で良いわね……」

俺は板チョコをすべて食べ終わった。

『俺は何かに縛られることが嫌いなんだ。御坂、板チョコサンキュ

ー』

「流雅さんは本当に自由に子供ばいですね」

佐天にも子供っていわれた。

『まあ、子供は子供さ。親の金で生きてるからな』

歩きながら話していると御坂たちの目的のデパートについた。

「あんた、どうするの？ 私達は服を買いに行くけど」

『荷物もちくらいやるよ。おごってもらったし』

一緒にデパートに入る。

『そうは言っても、女性の私服を探すの待つの面倒だし、どれくらいかかろうぞうだ？』

御坂たちが相談した結果1時間後に服屋によることになった。

(女の買い物って長いな……)

そんなことを思いつつインスタント食品やカップラーメンを見たり

本屋に寄ったり時間を潰すと・・・。

>このビルに爆発物があるとの情報がありました。お客様は速やかに非難してください<

放送があった。

『またかよ!』

俺はそんな叫び声を出した。

まあ、主人公だし・・・

俺はデパートの出口に向かうとカエルのぬいぐるみを持った女の子を見つけた。

(ぬいぐるみ・・・まさかな・・・)

『ねえ！ちよつと、そこの子！』

「わたし？」

『そう、君。そのぬいぐるみどうしたの？』

「メガネかけたおにーちゃんがお花をつけてるおねーちゃんにわたしてって」

(メガネかけた男が犯人か・・・ちよつとまで、お花つけたおねーちゃんって・・・初春！？ってことは・・・犯人の目的は初春か？いや・・・多発してる爆発事件ですべて初春が関係するとは思えない・・・まさか、ジャッジメント風紀委員か！?)

俺は今までの出来事を連想させ、犯人の考えを読んだ。

『おにいちゃんはお花をつけてるおねーちゃんの知り合いだから預かるよ』

「じゃ、お花をつけてるおねーちゃんに渡してね」

『うん。解ったよ』

そう言って女の子からカエルのぬいぐるみを預かる。

そして、出口に女の子が行ったことを確認し・・・

階段の方に向けて上を目指す。

(こいつが爆弾なら・・・このデパートで爆発させるのはやばい・・・どこに投げてても危険だ・・・だったら、上しかない！)

客はいないので簡単に上っていける。
上っていくと御坂と初春がいた。

「あんだ！何で上にあがってるのよ！」

『こいつが爆弾なんだよ！どこで爆発させても、危険だ。だから、空に向って投げる！』

俺は少し立ち止まり説明する。

「危険です！」

「そんなの、私のレールガンで！」

『馬鹿か！どこに撃ったって被害が出るだろ！大体、お前のレールガンだったらもつと被害でる』

ぬいぐるみが消え始めた。

俺は左手を天井に向け、指を伸ばし。高圧力の水を出す。

天井を突き破り瓦礫が落ちてくる。それを無視して、自分の足元から水を作り屋上に向かって水を流す。

「ちよ、待ちなさいよ！」

御坂の声が聞こえた気がしたが……。気にせずに、屋上に飛ぶ。大量の水と共に屋上より上に跳ぶ。

この時点でぬいぐるみは手と頭と足しか形を保っていない。水を上に流すのを止め。右手でカエルのぬいぐるみだった物の手を高く投げる。

この行動はぬいぐるみが消え始めて3秒で行われている。

『ズドン！っ。』

大きな爆発音がする。

(前回より威力が上がっている!?)

俺を守る物は何もなく熱と爆風に包みこまれて、落ちていく。
下にはコンクリート……。

(あ……。死ぬかも……)

俺の体は地面に叩きつけられた……。

まあ、主人公だし・・・（後書き）

・・・。

あれ？流雅さん。もう、死ぬしかないんじゃないかね？

・・・。まあ、主人公って死なないっていう。不死属性ついてるか
らね・・・。

・・・。先に言います。すいませんでした！

> () <

俺だけができること

ザワザワ

(・・・。俺は生きている?)

地面に激突したわりには体は正常だ。

立ち上がるうして腕に力を込める。

(!?)

左肩から先の感覚がなかった・・・。

(左腕か肩から落ちたか・・・)

痛みを感じながら動く両足と右手で体を起こす。

「おい、大丈夫なのか？」

「嘘でしょ・・・。あの高さから・・・」

そこらじゅうから声がする。

『みなさん。動かないでください』

声を出したはずが何も伝わっていない・・・。

(声が出ない!?)

「何か言ってるぞ」

近くの男性が俺の口が動いてる事に気がついた。
そして、近づいてくる。

『みなさん。動かないでください』

再び言うと男性がその言葉をみんなに伝えてくれた。

記憶の中からぬいぐるみを持っていた女の子の言葉を思い出す

『メガネかけたおにーちゃんがお花をつけてるおねーちゃんにわたしてって』

(おにーちゃんってことは少なくとも女性じゃない……)

『犯人は男性です。女性は少し離れてください』

男性が大声で復唱してくれると男性は動かず女性は後ろに下がった。

(メガネをかけた人が……)

『その中のメガネを……』

思った。子供がメガネをかけたおにーちゃんと言っていたが……。

それはサングラスなのか？ただの眼鏡なのか？

『その中のメガネとサングラスをかけていない人は下がってください』

再び男性が復唱し、金髪にアロハシャツ、サングラスをかけた少年と学生の制服の眼鏡の少年の二人が残った。

「ちょっと、待ってにゃー」

サングラスの金髪が言う。

「なんで、メガネとサングラスなんだにゃー？あいまいだと思うぜ
お」

勘が良いというか面倒な奴だ……。

「そうです。大体、どうやって犯人かを調べるんですか？持ち物に爆弾なんて持つてるはずないでしょ！」

学生の方も怒り出した。

その時、デパートから御坂と初春が出てきた。

「流雅さん!？」

初春が驚いて近づいてくる。

「あんた！何やってんのよ！」

御坂も近づいて怒鳴る。

『うるせえ……。初春。そのサングラスとメガネの少年を事件の重要参考人に……。』
「え？」

戸惑う初春。

『犯人はきつとどつちかだから』

「でも、どうやって？」

『バンク書庫に能力が乗ってるだろ。そこから事件に使われてる能力を探しだせ』

「は、はい！」

(これで……。俺の役目は終わった……)

俺は役目を果たしたと緊張から開放され、意識を手放した。

俺だけができること（後書き）

いやー、金髪にアロハシャツ、サングラスをかけた少年を出すなんて予定外でしたよ。

流雅さんも必至に犯人を探して……。あ、流雅の言葉を復唱していたのはタダの一般人でこの作品にでるのは最後でしょう……。これからもよろしく願います。

入院。すべてが異常

目が覚める朝で見たことのない病室にいた。

(病院か……。救急車を呼んで運ばれたってどこか)

「やあ、目が覚めたかね？」

扉が開く音と共に初老の男性が入ってきた。

(……。どこことなく……。カエルに……)

『ここは？そして、あなたは？』

「ここは、学園都市第七学区にある病院。僕は冥土帰し(ヘヴンキヤンセラー)と呼ばれている医者だ」

『それはそれは、治療してくれたことを感謝してます』

「ああ、君の左肩から腕は大怪我だね。治療はしたから3日は絶対安静ね？」

(3日？馬鹿な！？その程度の怪我なはずがない)

『え……。ちよつと待ってください！屋上から落下でその程度っておかしくありません？』

「それで直るんだ。文句はないね？」

『はい』

「それじゃ、僕はこれで失礼するよ」

そう言ってカエ……。医者は出て行った。

(凄腕の医者か……)

そして、やることがないので眠った。

次の日。
御坂たちがやってきた。

「本当、あんたって馬鹿ね」

御坂が入ってくる。

何か袋を持っている。

『うるせえ。人間にはやらなきゃいけないときがあるんだよ』

「それで爆弾抱えて空に？」

『おう！』

「どこの世界の主人公よあんた！」

「御坂さん、入り口にいると私達が入れないですよ」

御坂の後ろから初春と佐天が入ってくる。

「とりあえず。これ」

御坂が持っていた袋を渡す。

「その辺で買ったクッキー。高かったんだか感想おしえなさいよ！」

『おう……。ありがとう』

(やさしいが……。怖い……)

「御坂さんが悩みに悩んで選んだものなんだよ」

「余計なこと言わないでよ！」

顔を真っ赤にしながら言う

『・・・サンキュウ・・・』

そして、その後、事件の結末などを教えてもらった。
犯人が学生で、その学生は倒れたことなど。

もともとのレベルが2だったこと。

事件のすべてを教えてもらった。

時は流れ退院した。

入院。すべてが異常（後書き）

もう、めっちゃくちゃだぜ！

何だろう……。最初、この作品を書いていたときはここは御坂が一人に来て会話をさせる予定が……。なぜこうなった！？

こゝ、これからもよろしくです……。

オリジナルな方向に書きたいよね？

退院して次の日。

俺はぶらぶら歩いていた。

(暇だ！)

怪我をした左腕は完治しており。

ただ目的もなく歩く流雅。

その時、目の前につんつん頭の……。

『当麻』

手を振って近づく。

しかし、つんつん頭の当麻はこっちも向かずに歩いていく。

(気づいていない？)

『おい、当麻！』

追いついたので手を掴む。

「え？」

(俺の顔を見て驚いている？)

『どうしたんだよ。当麻』

「ああ、聞こえてなかったんだよ」

いつも顔に戻り言う。

(びっくりした……。人違いだと思った……)

『お前そつくりの人違いだと思つたぞ』

「そんなわけないだろ」

『それもそうだな。当麻これから暇か？』

当麻は少し考え。

「いや、これからタイムセールだ・・・」

『そうか。お前も大変だな一人だと』

「大変だよ・・・」

『それじゃ、またな』

そう言つて当麻と分かれた。

（なんだか今日の当麻は感じが違つたな・・・）

ちよつとした不安を感じながら俺は町をぶらつく。

そうすると・・・

「お前、流雅翠だな？」

体の大きいお兄さんが俺を呼びとめました。

『ええ、そうですけど・・・』

次の瞬間。

その後ろにいた男達に囲まれた。

「ついてきてもらおうか」

（危ない感じしかしないな・・・）

『嫌つて言つた時のこと聞いてもいいかな？』

「ついてきてもらうから連れて行くに変わるだけだ」

(すごいな)。どうやって連れて行かれるのかな。ってこれは犯罪だよな?)

敵(男達)の数は6人。

(突破できるか?)

その考えはすぐに否定する。

『解ったよ。ついていくからなんにもするなよ』

連れて行かれたのは、何時取り壊されてもおかしくないボロビルだった。

「さあ、用こそ。我がアジトに」

俺を迎え入れたのは俺の学校の制服を着た奴だった。

オリジナルな方向に書きたいよね？（後書き）

あー、合宿明けでつらいです・・・。
バカテスの次が思いつかない・・・。
がんばりますので応援よろしくです・・・。

空気使い

「お前らは下がってくれ」

「はい」

俺と同じ制服の命令を聞いて男達は出て行った。

『同じ高校の奴が俺に何かようか？』

「ああ、俺は高坂高校の1年2組。加嶋孝太かしま こうただよろしく」

(あ、高坂高校だ)

俺はやっと自分の通う高校の名前を思い出した。

「さて、1年3組。流雅翠君。君に誘いたいことがある」

『名前とクラス知ってるとかストーカーさんですかおい？』

「爆弾事件は有名だったかな」

「そうですね、ストーカーさん」

その時、俺の横を何かが通った。

『ドン』

横の壁に何かが当たった。

「なあ、水使い(ウォーターティマー)」

『なんだ？』

「お前が水を操るなら俺は空気を操るんだぜ」

(空気使い?)

「風を作ることも簡単なんだぜ」

『なるほど……。俺とお前じゃ相性は悪いみたいだな』
「お前を俺たちのチームに誘いたい」

(は？チーム？)

「俺たちのチーム。『ブラスター』にだ」

ブラスター……。聞いたことある。無能力者を使いいるんな奴を襲わせているとか……。

『断つたら？』

そう聞いたら。

「拒否権はない」

孝太は手を動かすと。

『がぁ……。！？』

(息ができない!?)

「解つただろ？ここでの拒否は死だ」

息ができようになりむせつつ息を整える。

『なるほど……。』

「おぁ……。どっしりするっ」

(……。どっしりする？って答えはひとつしかないんじゃないのか……)

・？いや、争うって言葉があるか)

< やめた方が良いでしょう >

『 え？ 』

< 黙ってください >

(テレパシー意思通達？そんな馬鹿な……。学園都市でもそんな能力は聞いたことないぞ……)

< 実際にあるんですよ。今は孝太の言うとおりにはしないと殺されま
すよ >

「 どうしたんだ？こんな条件に迷うのか？ 」

『 考えさせてくれ 』

俺は時間を作るためにそういった。

「 解った。なら仕方ないな 」

そう言っつて孝太は立ち上がる。

< 逃げてください！ >

『 は？ 』

頭の中に飛び込む声に疑問を持つ。

「 殺すか！ 」

孝太立ち上がりながら言った。

『があ！？』

腹部辺りに空気の塊が当たり。当たった時に爆発のような衝撃が来る。

風に飛ばされ吹き飛びコンクリートの壁に当たる。

頭の次に体とあたり。ゴンッと鈍い音がした。

『嘘だろ・・・』

手を頭に当てると手は真っ赤になっていた。

空気使い（後書き）

テレパシーに空気使い・・・。

能力出しすぎですね・・・。

原作をあまり知らないんですが・・・。

テレパシーを使うキャラクターがいたりします？

能力の差

「真っ赤だな水使い！」

『ハハハ……。マジかよ……。』

<今すぐ誤りってください。まだ何とかなるかもしれない。>

(やばい……。空気を操るあいつに勝てる気がしない……)

「ほら！どうした？簡単にくたばるんじゃないぞ！」

重い空気の塊が俺に飛んでくる。再びコンクリートの壁に張り付く。

「殺したってかまわないんだぞ！」

空気の塊が飛んでこなくなり俺は地面に膝をつく。

『はあ……。はあ……。』

<誤れば生きれるんですよ！>

『俺は、テメエの下になる気はねー』

「貴様！」

俺は目の前に水の壁を作る。

『バン！』

水が空気によってはじけ飛んだ。

『な！？』

驚いたのは加嶋じゃなく俺だった。

（おかしい、どうして水の壁に攻撃を撃った……。どうして、壁の向こうにいる俺に撃たなかった……。？）

この時、俺は敵の能力の秘密に気づきはじめていた。

人差し指と中指を伸ばし、加嶋に狙いを定め、人が死なない程度の圧力で撃つ。

「く……」

奴も空気に対抗する。

<何で戦うんですか？>

攻撃は相殺され俺の呼吸に妨害が入る。

『が!?!』

呼吸困難になる。

「苦しんで死ね!」

（意識が……。空気が……。）

<しっかりしてください!>

俺は頭の周りに薄い膜をはる。状態としてはシャボン玉の中に頭がある感じだ。

『ふう……。』

「な!?!」

『なるほど、お前の能力がわかってきたぞ』

「!？」

「お前の能力は空気を本当に操ることしかできない。いや、もつと単純に空気を自分の下に集めるか自分から遠くに行かせるか。用は引力と斥力だな。だから俺の間に水の壁があつたらそれを壊さなければならなかつた。現在のこの状況は俺の近くの空気を少しの力で集めてたんだろ？それで俺の周りに空気がなく、呼吸困難か。手の込んだこつた。強くしたらばれるもんな！」

「糞、能力が解つていたって負けない！」

(俺の周りに水の壁で空気の流れを遮断している)
甘い考えをしていると腹部に空気の弾丸を打ち込まれる。

「死ね。死ね死ねー！」

「が・・・!？」

意識が飛びそうだが・・・。

『バタン』

圧倒的に流雅がやられていた状況で加嶋が倒れた。

『能力を使える俺を殺せる奴なんかいないんだよ・・・』

「な、何をした」

倒れた状態で聞いてくる。

『俺の名は水使いだ。お前の頭の中にある脳の近くにある水を一度だけだが揺らした。頭を殴られた気分だろ？』

俺はボロボロのままです。その場に座りこみ。説明を始めた。

「う……」

『さて、俺は帰るとするか……』

痛む腹部を押さえて出口を目指す。

「なんだと!?!」

『俺は、気まぐれなんだよ』

(そんなことを言ったが正直な話、無事に家にたどり着くかも怪しい……。レベル0の集団はいないようだが……。道で行き倒れになるかもな……)

その日、俺は道端で倒れた。

能力の差（後書き）

テレパシー？何それ幻聴だろ？

つてくらい無視です。

翠も戦闘中に相手にできません。

いやー、加嶋君はライバル的存在でいてもらおうかなって思ったた
んですが……。

一瞬で散りましたNE。

さあ、次はどうしましょ？

新たな出会い

目が覚めれると見覚えのない部屋だった。
俺は布団の中で眠っていたようだ……。

(なんだ……?ここは)

「ここは私の部屋ですよ」

俺はびっくりして立ち上がり2本の指を伸ばして声のしたほうを見る。

「大丈夫ですよ。敵じゃないですから」

『なんだと?』

(頭でもおかしいのか?普通に怪しいだろ?『ブラスター』の仲間か?)

「頭はおかしくありませんよ。『ブラスター』については知っているだけです」

(考えていることがばれている……?)

「あ、私は考えていることがわかるだけじゃなく」
<こんな風に相手に思ったことを伝えることができます>

(!?)

『あなたが加嶋と戦ってる時にささやいていたのか』
「そうなりますね。勝つとは思いませんでしたけど」

『なぜ、俺を助けようとした？』

「連れて行かれるのを見てましたから」

『へー……。なるほど……。』

「助けに行けたら良いんですけど……。私には何もできませんか

ら……。』

『そうか』

・・・

「にくいですか？」

『ん？』

「連れて行かれるのを見て何もしなかった私がにくいですか？」

『何言ってるんだ？』

(こいつ、何言ってるんだか……)

『何もしてないなら頭の中でささやいていたりしなかつただろ？』

「……」

『さて、助かったよ。それじゃ……。』

「あの……」

『ん？』

「私は佐藤^{サトウ}壬華^{ミカ}」

『自己紹介がまだだったな。流雅翠だ』

「た、たまに心に話しかけてもいいですか？」

『別に良いが……。忙しかったら無理だからな』

「あ、はい……」

こうして、テレパシーを使う女の子、壬華と知り合った。

それから、朝とかに「おはようございます」とか、寝る前に「お休みなさい」とか伝わる。

いきなり過ぎたりするが……。面倒だと思ったことはなかった。
これからも、楽しい日々が続くことを願った。

新たな出会い（後書き）

来ましたー・・・。

オリキャラ来ちゃいました・・・。

良いの？これでいいの？

これから・・・。どうなる俺！

真実

俺はその日、散歩をしていた。

(楽しいことがない・・・)

佐藤が朝から連絡をしたら、少しは楽しかったのにな・・・。

『暇だー』

「不幸だー！」

近くで聞き覚えのある声と発言が聞こえた。

あたりを見るとスーパーのレジの前でつんつん頭の少年が頭を抱えていた。

俺はスーパーに入って。

『よう、当麻』

「あ・・・。奇遇だな」

『どうしたんだ？』

「・・・円・・・」

『ん？』

ぼそぼそ言ってる円しか聞こえなかった・・・。

「2円足りない」

『・・・はあ？』

俺の財布から2円が消えてスーパーを後にした。

「本当にありがとう」

当麻が両手を合わせし頭を下げて言う。
「どうやら、当麻は安い物が並んでるのを見てつい、買いすぎてしま
ったようだ。」

『礼なんていいよ』

「いやいや、1円を笑う物は1円に泣くんだからな」

そんな会話をしていると・・・。

目の前に修道服をなぜか安全ピンで止めて来ている少女がいた・・・。

「あ、当麻ー」

俺は驚いた。こんな怪しさの限界を超えたような存在が当麻を呼ぶ
のだから。

「あ、インデックス」

・・・。

(当麻、とうとう・・・。犯罪に・・・)
俺は当麻の肩に手を置いた。

『当麻、暖かいスープ飲んでケーサツに行こうか・・・』

「ちょっと待て、誤解をしてるぞ・・・」

哀れな当麻にやさしい声をかける。

「当麻、その人、誰？」

インデックスと呼ばれた危険人物が俺を指で指す。

『俺か？俺は、練磨組徳れんまくみとくっていうんだ』

「注意」他人に偽名を使うのはやめましょう。
俺は面白がって適当な名前を言った。

「へー、変わった名前だね」

危険人物は嘘にも気づかずに笑顔で答えた。

(多分、当麻が訂正するだろう)
そんな考えをしていた。

「そう、練磨組徳って言うんだ。変わっていても名前は名前だからな」

(!?)

俺の中で数秒何も考えられなくなった。

(今、こいつ何を言った？冗談か？それとも……)
俺はここで違和感に気づく。

(そういえば、最近……。俺の名前を呼ばれていない……。まさかだが、こいつは上条当麻じゃない？)

「ねえねえ、組徳」

危険人物が俺の目の前に来ていた。

他人から見たら俺と当麻(の格好をしている奴)は変態かなんかだと思われても仕方ないだろう……。

『あー当麻。まだ買い物終わってなかったな次はこっちだな』

俺が早口で言っただ麻の右腕を掴み走り出す。

「え？どうしたんだ組・・・！？」

当麻が驚くが俺が腕を掴んでるので逃げれずに入る。

後ろで何か聞こえたが気にせず走り路地裏で人目のつかないところまで行く。

「何なんだよ。組徳」

未だに組徳と呼ぶ当麻。

俺は呼吸を整えながらゆっくり聞いた。

『お前は誰だ？』

当麻の顔に少しの異変があったが・・・。

「お前も知っている通りの上条当麻さんですよ」

『なら、俺の本当の名前とであった時のことを言えるだろ？』

この時、完全に当麻の顔から余裕がなくなっていた。

「何時気づいたんだ？つと聞きたいけど偽名を使ったからだよね・・・」

『ああ。全くわからなかったよそれまでは』

「できれば、誰にも話さないでくれ」

『それはそれだ。お前は俺の知っている上条当麻なのか？』

「ああ、記憶喪失なんだ・・・」

『そうか。なら、動くなよ』

俺は能力を使う。空中に水を作り当麻の右手に当てる。

『バリン』

水は消えた。

『イマジンプレイカー幻想殺しを持つてるなら当麻のようだな』

「知ってるのか」

『まあ、これからは別人として相手するよ。まあ、縁を切るきはないけど。こっちも混乱してるんだ。悪かったな。後俺の本名はは流雅翠だ』

「ああ」

俺はそれだけ言って路地裏を離れた。

そういえば……。王華の住んでるマンションの近くか……。俺は王華に合ってから帰ることにした。

真実（後書き）

上条さんの秘密を知ってしまった翠。
これから、またとある科学の方向に走ります。

走れ！翠

俺は佐藤の部屋の前でインターホンを鳴らした。

>ピンポン<

。。。。

反応がない。。。。

『出かけてるのか？』

ドアノブを捻ると空いていた。

(。。。。泥棒？)

俺はドアをゆっくり音を立てないように閉めて中に入った。

(物音はしない。。。。すでに逃げた後か。。。。?)

部屋の中に入っていくと、倒れている人を見つけた。

『さ、佐藤！？』

佐藤が部屋のだ真ん中で倒れていた。

『おいおい、マジかよ。。。。』

呼吸をしているかを確認する。

(呼吸はしている)

『佐藤！おい、佐藤！』

(反応がない。まだ間に合うか・・・?)
携帯を取り出し110番を・・・。

『つて、違う!』

つい、携帯を放り投げてしまう。

投げた携帯が窓から落ちた・・・。

>バキ<

3階から落ちた携帯は嫌な音を出して地面に落ちた。

(・・・)

ちなみにここから病院まで徒歩で50分かかる。

『冷静になれ俺・・・』

そう、ここはマンションの部屋。電話があるはずだ。

受話器を見つけて冷静に119番を押す。

『・・・』

(はあ?)

俺は目を疑った。電話が使えない。

『冷静になれるか!』

受話器を手放す。

(強い電撃か電波がないとこの辺の物は壊れないはず・・・)
ふと、常盤台の中学生を思い出した。

(まさかな・・・)

『行くしかない……』

俺は倒れている佐藤をおんぶし、部屋を飛び出した。

『近道だ』

3階から俺は飛び降りて下に水を大量に作り出した。

水の中に入った俺は勢いをこらして、すぐに地面に到着した。

『ここから、走る！』

俺は全力で走った。

それはもう、足がなくなるかもしれないって思えるくらい。

途中で当麻が御坂をつれてダッシュしてるのを見たが関わっている暇はない。

30分ほどで冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）の入る病院についた。

『こ、こいつをだのみま^ずず！』

喉が枯れていて、にこった声になった。

その後、佐藤は診察された。

走れ！翠（後書き）

まあ、設定としては御坂の電撃で電話が死んでます。

幻想御手

俺はロビーで待った。

冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）が「大丈夫だよ」と言っていた
が気になる。

少しの時間待つと冥土帰しが来た。

『佐藤は、佐藤は大丈夫なのか！』

「落ち着いて、僕は絶対に戦場では勝つんだよ」

『なら、大丈夫なんだな・・・』

「そうとも言い切れないんだよ」

『え？』

「あの子。レベルアップ幻想御手を使っているね」

『・・・え？』

（佐藤が幻想御手を使っていたって・・・？）

俺は驚いていたが冥土帰しが話を続けた。

「最近、幻想御手を使って倒れる人が多いんだよ。僕でもまだ治し
方が解らない」

『そ、そうですか・・・』

「でも、僕がいる限り絶対に死ぬことはない」

『よろしくお願いします』

そして、病院をでた。

（こんなことになるなんて・・・）
暗い気持ちで家に戻る。

「翠」

遠くから当麻が俺を呼んだ。

『当麻か・・・』

「どうした？暗いな何かあったのか？」

『まあ、いろいろな・・・』

当麻に状況を半分くらいはなした。

「そうか、大変だな。俺にできることあるなら言ってくれよ」

『ああ、解った。そのときは頼むぞ』

この当麻は昔と同じような気がした。

当麻は飯を作らないと食われるがどうたらこうたら言っただけで帰った。

『あいつもあいつで大変なんだな。記憶を失ったんだから・・・』

「誰が記憶を失ったのよ？」

『誰ってそりゃ・・・』

変な汗が出る。

『こんばんわ、御坂』

「挨拶なんて、どうでもいいからさっきの話話を話さないよ」

(やばいな、当麻から言わないように言われてるのにな。何とかしてごまかさないと・・・)

『俺の読んでる小説でそんな内容があったんだよ。かわいそうだよな全く』

「なんだ、そんなこと？」

『そんなことだが』

何とかごまかせた。

「本当、私の周りって、レベルは低いのに勝てない奴ばかり」

『ばっかりって俺以外にも喧嘩売ってるのかよ……』

(そいつも相当不幸だな……)

「ええ、レベル0の癖に能力が通じないの……」

数分前にあつたつんつん頭の記憶消失者の顔を思い出した。

(あ、相当不幸な奴だった……)

「そつだ。勝負しなさい勝負」

『あ、門限の時間だー』(棒読み)

そう言つて俺は全力で家に走つて帰つた。

次の日、足が痛くなつて何もできなかったのは言つまでもないだらう……。

幻想御手（後書き）

とある科学のレールガン、原作をお読みの方は気がついていてるでしょう。

そう！時系列がおかしいのです！

まあ、気にせず行かせてもらいます！

スキルアウト

俺は今日もまた、学園都市を歩いていた。
理由としてはいくつもある。

1つ、家にいても暇だ。

2つ、暇つぶしをする相手がない……。 (佐藤は意識不明。御坂に関しては一昨日逃げたことを根に持ってそうだ……)
この2つが主な理由だ。

そして、学園都市をぶらついている。

気づいてみると人気のないところにきていた。

(何もなさそうだ。戻るか)

「おい、金だせやあ！」

「ひい……」

人気のない道の建物と建物間の空間でそんな声がした。

……。

(げ、幻聴が聞こえる……)

俺は現実逃避をする。

「な、殴らないで……!」

「だったら、さっさとだせや!」

……。

(やっぱり、仕方ないか……)

俺は走りだし、袖を掴んでいる不良と掴まれて目を閉じている少年を見つけた。

俺は何も言わずに袖を掴んでいる奴を殴った。

「ぐあー！」

「えっ？」

なみだ目になっている少年は状況に対応できていない。

『さっさと逃げる』

「あ、ありがとうございます」

そう言っつて少年は逃げた。

「て、てめえ！」

倒れたまま不良が言う。

『うるさい』

不良の腹部に蹴りを入れる。

「ぶ……ぶ……」

(あー、耳がキーンってなる)

「なんだなんだ？」

「どうしたよ」

『……』

建物の影からぞろぞろと人が出てきた。

「てめえ。俺たち『白神』に喧嘩売るとは良い度胸してるな！」

『まさか……。スキルアウトかよ!』

前にも『ブラスター』とかいたな……。

「覚悟しろよこら!」

『マジかよ……』

ざっと数えて20名ほどの集団……。多すぎだろ!?
それから何分立っただろう……。
俺は殴られたり、殴ったり……。
後から気づいたのだが能力を使えばよかった。

そして、俺は20人ほどを倒した。

『はあ、はあ……』

無理だ。これ以上は……。っと思つたときにもう一人立っていた。

『ま、まだ入るのかよ』

「俺の友達をやったのはお前か」

真剣な目で問う。

『しらないな。もう、何人もやったからな』

「なら、仕方ない。この辺だと迷惑だ。場所を変えないか?」

『はあ、はあ……。良いだろ。そろそろ警察や風紀委員ジャッジメント来ても困る』

「この辺の川辺に行こう。住民はいないから迷惑にならん」

(御坂と戦ったあの場所か……)

『良いだろ。行く』

そして、俺とそいつは距離を開けて川辺に向った。

天気制御

川辺に着いた頃にはすこし体力が戻っていた。

(これくらいなら……。勝てるか?)

相手は無能力者の集まりのスキルアウトの集まりの一人。

能力を使えば勝てる。

俺は余裕だった。

「いくぞ」

拳を構えた奴は先に動いた。

右と左から来る拳を避けた俺は相手のあごにアッパーをうつ。

「があ!?!」

少し中に浮かんだ後、相手は倒れた。

そして、ゆっくり立ち上がった。

「流石に……。あれだけの人数を倒しただけあるな……」

『まだ、やるか?』

「本気を出そう」

そう言っつて右手を前に出した。

突風が俺を襲う。

俺は倒れて地面を転がった。

俺はすぐに立ち上がった。

『おいおい……。少し前に空気使いつつとやりあったのにまたかよ』
「空気使いたいしたことないな。俺が使うのはウェザーコントロール天気制御。お前は

自然に勝つのか？」

(天気制御って……。そんなのありかよ……)

「俺が能力を使えば。雨だって、嵐にだってなるんだよ」
『そんな能力ありかよ』

思うとさっきまでの青空がなくなっている。

「落ちる雷！」

ゴロゴロ！

『嘘だろ』

天候を操るつと言うことはすべてを操ることになる。
俺は自分の上に水を作り出し盾にした。

『ズドン』

光と共に耳が痛くなるような大きい音がした。
雷は俺の作った水に直撃し消えた。

「水で雷を消した？純水か」

俺の能力がわかったらしい。

『おれの能力は水使い。くらえ！』

天気制御の奴の周りに水の弾丸を作り飛ばす。

「つく」

威力は抑えたが結構痛いはずだ。

「なるほど。お前も珍しい能力だな」

奴は拳を再び作り殴りに来る。

『それはお互い様だろ！』

拳を避けて奴の背中に再び弾丸を当てる。

「結構痛いんだけど！」

奴の蹴りが俺の足に当たる。

『ぐー！』

20人ほどのスキルアウトとの戦闘で傷ついている俺にはつらかった。その場に倒れそうになる。

「どうした！その程度か！」

奴はこの隙に足をあげ踵落としをする。

俺は大量の水を作り出し奴に当てる。

速度はなく威力もないが奴は流されて川に落ちる。

「ぶはー！」

落ちた時に水しぶきができたのでその水を操り空中に留めた。

「この野郎！」

川から出ると同時に殴りかかる。

空中に留めていた水を弾丸として相手に飛ばす。

「その手はきかねえ！」

殴りながら水の弾丸が近づいている事に気づいていた。

その瞬間気温が涼しくなった。いや、涼しいを通りこして寒い。

殴られて地面に倒れながら寒さを感じた。

ぽと、ぽと

その時、氷の結晶が落ちた。

「へっくしゅん！」

奴のくしゃみと共に。

俺は目を疑った。

川が凍っていて、奴の体も半分凍っていたからだ。

「やべ、寒くしすぎた・・・」

天気制御（後書き）

今回登場しました。新能力。ウェザーコントロール 天気制御は豪さんが考えた能力です。
豪さんありがとうございます！

> (| |) <

愉快的な奴

『お前は……。気温まで操るのかよ』

「誰もあや……くしゅん。操れないなんて言っていないだろ」

暖かくなっていった凍りついた奴の体が融けていった。

川も一緒に融けた。

「さて、再開するか」

奴の目が鋭くなる。

奴の手の上に風が集まる。

『何でもありだな……』

「ああ。自分でも思うよ」

その瞬間。

暴風がおれに襲い掛かった。

地面を転がる。

「これは防げないだろ！」

(防げるものじゃないのは確かだ)

再び、手の上に風を集める。

「俺のダチをやったことを後悔させる」

(どうする。脳揺らすか？いや、あれはやりたくはない)

俺は隣に川が流れている事を思い出す。

(大量の水はあるじゃないか)

「くらえ!」

暴風が来る。

俺は隣の川に飛び込む。

「な!?!」

俺は川の中で水を操り静かに敵に近づく。

「その状態で防げるか!」

水中で奴の声が聞こえた。

空が光ることが微かに見えた。

雷が川に向って落とされる。

『ぐぞ!』

水中から上半身を出し右腕を空に向って上げ水を生成。

(完全な純水じゃない!)

川の水が大量に混じり純水ではなかった。

雷が落ちる。

『が!?!』

俺の声は雷の落ちた音によってかき消された。

(全身が痺れている)

威力は死なない程度にされていたのか死にはしなかった。

「これにこりたらかつあげなんてするなよ」

そんな風に聞こえた。

(え?)

奴は俺を陸地に引き上げてから去っていった。

(か、勘違いだ!)

5分後

痺れもなくなっていき。

俺は家に帰ろうと思ったとき。

「おい!そこのお前!」

ウェザーコントロール
天気制御が俺の方を見て叫ぶ。

痺れた体を動かすのをやめて相手を見る。

「すまない!本当にすまない!俺のダチをかつあげした奴かと思っ
たが勘違いだったなんて!すまない!」

土下座までして誤った。

『なら、仕返しでもさせてもらおうか』

「ああ、なんでもしろ」

顔を上げずに言った。

。。。

『俺は流雅翠って言う。友達になろう』

そう言って俺は土下座をする奴に痺れて少しずつだが手を差し伸べ

た。

「良いのか？俺は・・・」

『やられたから仕返しなんてどこの三下のやることですか？お前は面白い。仲良くしようぜ』

「あ、ああ！俺は高井 健一だよろしく」

俺はまた、愉快的な奴と友達になった。

愉快な奴（後書き）

次回たり。

AIMの集合体が出てきます。

ラーメン

次の日

俺が起きたのは珍しく11時ごろだった。

『こんなに長く寝るのは久々だな・・・』

着替えながら何をしようか考えている。

ふと携帯を見ると昨日知り合った健一からメールが来ていた。

9:30ころに・・・。

内容としては昨日のお礼に何かおごらせてくれっといったものだった。

・・・。

俺は昨日のことを思い出そうとしたが。

とりあえず、昼飯をおごってくれっり返信した。

すぐに返事が返ってきて、OKのようだ。

集合場所を決め、すぐに向った。

「すまない遅れた」

『いや、いいよ』

「いやいや、約束の時間に遅れては問題だ」

『いや、おごってもらうからにはそんな些細な事はどうでもいい』

きっぱりといった。

「翠、お前っているいる凄いな・・・」

『そうか?』

「ああ、本人を目の前にそんなことを言えるのは凄いだろ・・・」

・・・。

「あんまり、本人の前でそういうこと言っなよ?」

『解ったよ』

「さて、飯くいに行くか。立ち話もなんだし、俺のお勧めのラーメン屋だ」

『待ってました』

健一についていき、ラーメン屋に行った。

『おいしいな、このラーメン』

「あつたりまえでい!なめてんのか小僧!」

『いえ、すいません・・・』

店の店長に怒られた・・・。

「店長の口は悪いがうまいだろ?」

小声で健一が言う。

『ああ、そつだな』

小声で答える。

>突然ですがニュースです<

テレビが緊急速報に変わった。

>学園都市に巨大な化け物が出現しました<

『そんなことあるのかよ!?!』

「うるさいぞ翠」

『あ、悪い……』

いや、突っ込むところでしょ……。

> 区には近づかないでください<

テレビ映像にはでかい物体と電撃が見えた。

(今……)

その時テレビ画面に電撃を放ちながら追いかけてくる中学生の姿が……。

(嘘だろ……)

見間違いかと思ったが……

テレビには御坂が手で頭を押さえながら化け物と戦っていた。

『健一悪い、先に出る』

「おい!どうした!?!」

俺は必至に走った。

ラーメン（後書き）

タイトルが変なのは気にするな！

敗北

俺は必至に走った。

「はあはあ……」

（まだ……。まだたどり着かない）

翠はまだ走り続けた。

御坂 side

（なんなのよ。この声は！）

< 苦しい……。何をやってたってダメなんだ……。努力なんて知ったって無駄なんだ >

私の頭の中に入っていくその声は、テレパシーのような物で送られている物だった。

「いい加減にしなさいよ！」

片手で電撃の槍を投げる。

化け物に命中し、化け物の体の半分以上が消し飛んだ。

（血も出ない？生物じゃない？）

< 能力は生まれつきの物なんだいくら努力したって変わることがな

い>

(つつ！さっきからこの声は何なのよ。諦めたようなことをぶつぶつ…)

その時、化け物が私を見た。

(！?)

私から出ている電磁波が妙な動きを察知した。

私の真上に大きなつららができたような。

私はその場から離れる。少し前に自分が立っていた場所に巨大なツララが刺さった。

<もう諦めようよ。これ以上は無理なんだ>

1つ1つの声が重なり無数の声が私の頭の中に入っていく。

「つつ！」

頭を抱えてその場に膝をつける。

(これもあれの能力なの?)

頭痛を耐えながら化け物を見ると私の入る方と全く逆に進んでいた。

「はあはあ…。ただ、暴れているだけなの？」

化け物を追おうとすると足が何かにぶつかった。

足元には化け物を作り出した木山春生が倒れていた。

追いかけていると警備員アンチスキルが倒れていた。

「こんなこと・・・」

化け物はまだまっすぐ動き続ける。

「お姉様！大丈夫ですよ！？」

その場に黒子が現れた。

「黒子。この人たちをお願い。私はアレを追うから！」

「え？お姉様！？」

黒子はその場に残して私は化け物を追った。

私は近くの砂鉄を集めて前に使った剣のようにし伸ばして化け物を切り裂く。

化け物の体は簡単に切れすぐに再生する。

「攻撃が効かないのにどうすればいいのよー！」

化け物が再び攻撃を仕掛けてきた。

氷やら電撃、炎いろんなものが作られ飛んでくる。

私は自分を守りつつ。前に進む。

<能力者は見下しているんだ。私達のようなおちこぼれを！>

「そんなことなんかない！」

その時、頭に響く声に集中力が取られた。

飛んでくる大きな氷。

「しま…!!」

気づいた時には遅かった。

巨大な氷は御坂に命中し御坂は倒れた。

御坂の周りにつららが作られ、御坂に向って落ちてくる。

(間に合わない!)

「お姉様！」

黒子が瞬間移動で現れ。すぐに私を連れて安全なところに飛ばす。

「しっかりして下さい。お姉様！」

私は痛む体を動かし、立ち上がる。

「黒子…。さっきの場所に戻して…」

「お姉様ダメです。そんな体じゃ！」

「それでも、止めなきゃいけないの!…」

黒子を怒鳴る。

『はあはあ…心配で来たって言うのに怒鳴る元気もあるのかよ』

その時、聞き覚えのある少年の声が背後からした。

side END

「何で入るのよ。あんた」

振り返りながら御坂が聞いた。

『こっちのセリフだ。突然前に出てきて』

「安全なところに逃げなさいよ」

『選手交代だ。テレポートの使えるんだろ？俺を化け物の前に飛ばせ』

「しかし、市民の方を危険なところ…」

ジャッジメント
風紀委員がそんなことを言い出した。

『飛ばさないなら勝手に行くだけだ』

俺がジャッジメント風紀委員を突き飛ばしてでも進もうとした時。

「黒子やってあげて…」

「ですが、お姉様」

「そいつは私より…。私と同じくらい強いから」

(今、御坂の中でプライドが勝ったな…)

「解りました。お連れします」

ジャッジメント
風紀委員が俺の腕を掴み一瞬で見ている景色が変わり目の前にテレビで見た化け物がある。

「ありがと。危ないから戻れよ」

「そうさせてもらいます」

そう言って黒子と呼ばれる者は消えた。

「さて、久々に本気を出すか」

敗北（後書き）

はい、御坂負けました！

もんくは聞きません！油断していたんだって思ってください！

力の持つ者（新）（前書き）

回想の最後の方が変わっています。

力の持つ者（新）

俺が本気を使うのは半年ぶりになるだろう…。

（水剣の生成…）

水を作り出し、右腕にまとわせる。

肘からまとった水を薄く伸ばして指先から30センチほどまで水が届いたところで形を止める。

水を高速で動かし、自分の腕に触れていない水が動いている。

見た目としては肘から先が剣のように水が形を作っている。

（右腕に水を固定…）

軽く右腕を振ると水は自分の腕と一緒に動いた。

（威力は…）

近くにある木に右腕を振る。

>ザザザ!
<

右腕を振ったときに水が当たった部分の木が削られていた。

（水の移動による。威力確認も終了）

今、俺の右腕は音無きチェーンソとなっている。

(さて、行くか…)

ちなみにこれをやっている時に他の演算までやれないので水を作ったりできない。

すこし、走ると化け物後姿が見えた。

化け物は移動が遅い…。

走って化け物に追いつくと俺は飛び。チェーンソーとなっている右腕を振る。

化け物の体は真っ二つになった。

『弱いじゃん』

真っ二つになった化け物を通り抜けて着地し後ろを振り向くと。

化け物はより大きくなって再生していた。

化け物の周りに炎やら氷の結晶が生成されていく。

(まずい…！)

炎や氷の結晶が俺に向かって飛んで来る。

俺は右腕を振り氷を真っ二つにして炎によって俺の右腕の水は水蒸気となった。

(作り時間はない！)

両手の親指、人差し指、中指を伸ばし合わせて両手から高圧力で飛ばす。

飛ばされた水は化け物を貫通したが再び再生する。

化け物の近くの木や岩などが中に浮かぶ。

『うそだろ…』

>私達、落ちこぼれを見下さないで！<

その時、今まで何度も聞いたことのある頭に直接話しかけられた。

(まさか…。これは幻想御手レベルアップを使った者の能力を1つにまとめた化け物なのか…)

「注意」翠はこれが何かを知らずに戦っていました。

気を取られている時に浮かび上がった木や岩が俺に向かって飛んでくる。

『この声が幻想御手による被害者のものだって言うなら…』

飛んでくる物体の上に水を生成し、水を思いつきり浮遊物と一緒に地面にたたき付けた。

『黙ってる！』

俺は叫んだ。

『俺のように凄い力が欲しいって思っているなら……』

右手から水を飛ばす。

『こんな力くれてやる!』

化け物が反撃をする。それを作り出した水をぶつけて相殺する。

『力を持って生まれた者の気持ちがわかるか？強者の戯言だと思っ
だろっがな。俺は力なんていらなかった!』

>努力したって天才には勝てないんだ<

その怒りをぶつけるかのように地面から化け物の体の一部が出てき
た。

『勝てない相手なら何もせず負けるのか!?一人じゃ勝てないかも
知れないだったら!皆で戦えば良いだろ!』

地面に向って水を飛ばす。

『強すぎる力を持って生まれてきた奴の気持ちがお前らにわかるか
!』

それは俺の心の奥に隠していた。怒りだった。

回想

俺が超能力を始めて使ったのは中学2年の時だった。

その時、俺と友達二人は近くの高校の不良達に絡まれていた。

その時、力の差つと言うものを俺は知った。

喧嘩には自信があつたが相手は5名。

友達である二人は全く歯が立たなかった。

俺は不良たちを殴ったり蹴ったりした。そのうち疲れ果て、俺の左腕を一人につかまれ。次に右腕をつかまれ…。

その後はサンドバックのように殴られたり蹴られたり…。

「おい、こいつらどうするよ?」

俺たちのかばんから財布を抜き取った奴が聞いた。

「もう少し、可愛がってからこの辺に捨てとこうぜ」

「そりゃ良いな」

うつすらとした意識の中でもその声は良く聞こえた。

『で、テメエら…。やるなら俺だけにしろ』

俺は二人を守りたかった。二人はすでにボロボロで床に倒れてた。

「そりゃいい」

そう言つて、一人が俺の友人の一人の顔を掴み持ち上げ。

他の一人が自分達の持っている金属バットで俺の友達の腕を叩いた。

「うわあああ！」

友の悲鳴。

「ハハハハ！」

笑う不良。

(やめる。やめる)

『やめる！』

その時、力をどう使つたかは覚えていない。

俺の声と同時に不良全員の右か左の腕から血が飛び出した。

「うわわあああ！」

「ちょ、超能力者！」

「ば、ばば、化け物！」

不良たちは片腕を押さえながらその場を去つた。

『二人とも…。大丈夫か…』

ふらつきながら友のそばによる。

「ち、近寄るな…」

「え？」

それは友がはつした冷たき一言だった…。

その後から良く覚えていない。どうやって帰ったのか…。親になんて言ったのか。

全く覚えていない。

後日、警察が俺を取り調べられた。

結果、能力の暴走つと言うことで事件は片付いた。

中学校3年になる時に能力開発の学園都市に行くことにした。自分で転校すると決めたのだ。

今まで仲良くしていた奴からの冷たい目線。

人は俺に近づこうとしない。

先生ですら俺のことを怖がった。

転校するまで…。いや、上条と出会うまで苦痛の学校生活をすごした。

回想END

力の持つ者（新）（後書き）

当麻さんの中学校は学園都市にあると調べてくれた方がいました。
なので一部変更したところがあります

決意

俺の怒りは攻撃という形で敵に襲い掛かる。

俺の周りに現れる無数の水滴。

(弾丸の装填。完了、数5千)

『全弾一斉に放て!』

水滴が槍の様な円錐になり化け物に向う。

化け物の体のそこらじゅうに穴が開く。

> やっぱり、私達を痛めつけるんだ…<

『俺はお前を止める! なんといわれてもかまわない』

> 苦しいよ。助けてよ。助けてよ!<

化け物の近くにある瓦礫が浮かび上がり俺に目掛けて飛ばされる。

『何時まで、何時まで助けを求めただけなのだ? 変われ! 今の自分から変われ! 進化しろ、今の自分から抜け出せ』

水を生成するが間に合わなかった。完全に避けることもできない。

(結局、油断した奴は倒れるのか。当然だよな…)

>ボキ！<

必至に右に避けた。しかし、俺の左肩に衝撃を受けた。

『うわわああああ！』

激痛が走り出す。

肩から体中に…。

（左肩が動かない。つ、つぶれた…！）

膝を地面について左肩を右手で押さえる。

（なんだか目が霞んできた…。思えば化け物はどこに向って進んでいるんだ？あの先に何があるんだ…）

実際には化け物は原子力発電所に向っていた。しかし、翠が知ることはなかった。

翠の本能がそれ以上先に行かせてはいけないとささやいた。

『行かせねえ…。絶対に…。止めてやるんだ…』

俺は化け物を追った。遅い化け物と走って追えない俺。

追いつけない。

俺は最後の力を振り絞り絞り水の特大な槍を作った。

(これを放つたら俺は何もできないかもな…)

後先を考えてられないので水の槍を化け物に投げつけた。

能力でも操作した槍はいきよいよく飛んで行き、化け物を貫く。

化け物の体の3分の2が消し飛んだ。

俺は膝を地面につける。

(もう、水を作ることはできない…)

俺の限界だった。片腕を失っている時点で俺は限界だったのかもしれない。

>痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い！<

頭に響く雑音。

俺に向ってツララが飛ばされる。

(当然だが避けれるなんて思っていない。迎撃するしかないだろう)

しかし、水はない。

「情けないわね」

目の前から聞き覚えの音がした。

>バチバチ<

電撃が走る。

その音だけで誰だかわかった。

『うるさいな。こっちも必至なんだよ』

俺は立ち上がりながら言った。

「ふらふらじゃない。無理しなくても良いわよ」

御坂は俺の方を向いて言った。

>まただ。また能力者は私達を見下すんだ<

『まだ、やることあるらしいからな』

化け物を止めたいと思っていても翠には武器がなかった…。

(このままじゃ…。足手まといか…。いや、水はまだある…)

『御坂…。その髪留め貸してくれ…』

「え?」

敵の攻撃を迎撃しながら不安にこちらを見た。

『早く!』

「なんなのよ！」

御坂は俺に髪留めを渡した。

『ありがとう』

そう言って俺は御坂の髪留めを自分の左手に思いっきり刺した。

覚悟

俺の左手に思いっきり刺さった髪留め。

「ちょっと、あんた何やってんのよ!？」

『血出してんだよ』

冷静に俺は言い返す。

「そうじゃなくて!」

御坂がこちらを向いた時に化け物が攻撃を仕掛ける。

血を集め血で攻撃を打ち落とす。

打ち落とすために使った血も俺の下に戻す。

『よそ見するなよ。危ないからな』

「あなたの方が危ないわよ!」

『そだ』

髪留めについた血を操り取り除く。

『返そうか?』

「なんで、普通にしてられるのよ!」

御坂は何時になく怒っている。

『お前だけに戦わせたくなくてね』

「え？」

『こつという危ないことは男の仕事なんだよ』

「あ…。え…！？」

顔を赤く染めていく御坂。

俺の顔は多分青くなっているんだろう…。

(やばい…。結構深く刺した…。だいぶ、痛い…)

それでも俺は血を能力で止めたり武器として操ったりしている。

『いくぞ…。御坂。攻撃は任せる』

「人任せなんだから！」

そう言っつて俺の横に立つ。

俺は血を剣の形にして固定する。

それを右手に持つ。

御坂は雷を槍にして化け物に投げる。

化け物は体の半分以上がこげた。

<君達は争うことしかないんだね>

巨大な氷が俺たちの頭上に現れる。

『攻撃だけに集中しろ!』

「うん!」

俺の言葉に返事をする。

俺は血の剣を液体にし高圧で打ち出し氷をバラバラにした。

「右!」

右から化け物の一部が迫ってくることを御坂が知らせる。

俺は血を集めて剣にして切り裂く。

「あんた!危ない!」

御坂が叫んだ時には遅かった。

俺の後ろに化け物の一部が…。

<捕まえたよ>

『しま…』

バチバチ！

後ろで電撃は走る。

『御坂、畏だ！』

俺は気づいていた。敵の知能が上がっていることに。

そんな奴がこれだけで終わるはずがない。

俺と同様に御坂の後ろにも現れた。

御坂は反応できていたが遅かった。

<さようなら>

『御坂！』

ドン！

「キャアアー！」

御坂は重力に押しつぶされるように地面に倒れた。

プツン！

その時、俺の中で何かが切れた。

覚悟（後書き）

御坂ファン…ごめん。

御坂が電波で異変が解るって言ったて、地面の中までは無理だろう
っと思った自分の作品です。

次回、覚醒された翠が化け物編の最後を飾ります…。

終戦

俺はゆっくり、御坂に近づく。

『冗談だろ……。起き上がれよ……。御坂!』

俺の声は届かない。御坂は立ち上がりはしない。

いや、動きすらしない……。

『うわああああああああああああああ!』

叫んだ。

喉が壊れるんじゃないってほどに。

俺に目掛けてツララや土などが飛んでくる。

『邪魔だ……』

水を生成し水の弾丸を打ち出す。

『壊す……。ぶち壊す!』

俺の頭の上にため池くらいの水の量が作られる。

俺の限界はとっくに超えている。

それと共に俺の怒りは限界を超えていた。

空中のため池から15本程度、水の槍ができて化け物に向かって飛ぶ。

『消えろ』

すべての槍が化け物の体に突き刺さる。

<そうやって、傷つけるんだね？>

頭の中に届く声。

『そろそろ、消えろ！』

俺はジャンプする。

背中から水を噴射させ化け物に向かって飛ぶ。

右手と水剣を作り出す。

俺を撃退するために飛ばされる木や石。すべてを水剣で切り裂く。

『はあああ！』

剣が届く範囲まで近づき、2度斬る！

切り口は深くない。意味もなく、危険な行為だと後々思う。

だが、自分の怒りを自分でぶつきたいと思った。

切り口が広がっていき、その切り口が俺を捕まえようとする。

俺は足から水を噴射し上に逃げる。

足からなので不安定で空中で一回転して地面に落ちた。

『なれないことするんじゃないもんだ…』

そう言ってる間に敵の攻撃が止まってるとは限らない。

振り返ると岩石が飛んできたので空中のため池から槍を伸ばし粉碎する。

<見下すな！そんなに強いことが良いことなのか！>

俺は再び飛びため池の中に入る。

そして、右手に水を纏わせて、巨大な剣を作る。

『知らないよ。そんなこと！』

右手を力いっぱい振り下ろす。

巨大な剣は化け物に当たる。

斬れることもなく、ただ、ぶつけたただけだ。

『はあはあ…』

体のあつちこつちが悲鳴を上げている。

(ハハハハ…。こいつ、活動停止って言葉あるのか?)

これだけやっても化け物は一切、疲れている様子を見せない。

<痛い、痛い!痛い!>

頭の中に常に聞こえる叫びを聞くにはダメージはある…。

しかし、それで何が変わるのだろうか…。

化け物の周りの岩石が浮き上がる。

(来る!)

俺の予想は正しく言えばあっているが少し間違ったものだった。

俺は岩石が俺に向かって飛んでくると思ったが…。

岩石が粉々に砕けてその破片が回りにいる人達を襲う。

<そつだ…。弱い物をいじめれば良い…。弱い物だけを!>

化け物の知能は変な方向に発達して行ってる。

俺の近くにいたのは倒れたままの御坂しかいないが…。砕けた岩石の石粒は俺の頭を通りこして、もっと後ろに飛んでいく。

振り向いて見えたのは俺と化け物が戦っているのを見ている警備員アンチスキルだった。

俺はため池をすべて警備員を守るために使う。

結果、誰一人も被弾はしなかった。

<弱いくせに守ってもらって…。弱い自分を怨め！>

まだ、終わっていない。

御坂に向って飛ぶ石が残っていた。

(水じゃ、間に合わない…。！生成もできない…)

『御坂！』

俺は御坂に飛びつき、守るように抱きしめる。

頭、背中、腕色んなところに石が当たる。

『があ！』

体が痛む。

(御坂には当たっていないな…)

『はあ、はあ…』

頭から血が流れる。

<弱い者なんて見捨てれば良いのに>

『解っちゃいねー…。弱い者を見捨てる？それでいいだと？良いわけないだろ！』

御坂をその場に残し立ち上がる。

『もう、良いだろ…』

大量の水を俺の近くに呼び寄せろ。

今まで使ったため池、血。すべてを集める。

大量の水を1つの巨大な槍にする。

『この槍で終わらなかつたら、負けるよ』

巨大な槍を右手で掴む。（槍が大きいので右手に乗せているように見える）

『うおおおお！』

槍を思いっきり投げる。

俺の能力で槍は速度を上げていく。それと共に表面から水が徐々になくなっていく。

<嫌だ！まだ、まだ、死にたくない！>

化け物を貫いた時には直径10mmくらいの槍だった。しかし、速度があつた槍は化け物を貫通し、何かを貫いた状態で化け物の外へと出てきた。

貫いていたそれは、跡形もなく消え去り。化け物の体も共に消えた。

『終わった…？』

俺の辺りには、木や石が散らばっていたり、戦った時の傷跡が残った。

『派手にやっちゃったな…』

しかも、びしょぬれだ…。

『御坂…。良い医者のもとに連れて行ってやるからな…』

御坂を背負って、歩く。

その後。黒子つと呼ばれていた風紀委員ジャッジメントに出会い。御坂を任せて。俺は警備員が呼んでいた救急車に乗って病院に運ばれた。

終戦（後書き）

翠が自分の限界を超えて問題解決・・・。
ありきたりだね・・・。

もう、最後の方手抜きって感じしますしね・・・。
駄文すいませんでしたー

間違いに気づいた時

そして、再び病院に…。

「君は、看護婦目当てなのかな？」

『あの、そんなことで肩を砕いた人とかいるんですか？』

俺は冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）に向って言った。

現在俺の左手はギブスでガチガチに固定されている。

「ん〜。僕の記憶だと肩から腕を切り落としてくる人はいたね」

（おろかな奴だな…。切り落とすなんて…。痛かったろうに…）

「そつえば、常盤台の子」

『御坂がどうした!？』

俺はベットから飛び上がるような勢いで身を起こした。

「無事直って、君より元気だよ」

『…。はあ?』

「あの子ね。気絶していただけで特に外傷はなかったんだよ」

（何だが、悲しくなってきた）

『…』

「それじゃ、明日退院ね。3日はギブスをはずさないようにね」
そう言っただけで、冥土帰りは出て行った。

1時間後

『はあ…。暇だ…』

誰も来ない…。現在時刻16時。

『俺のお見舞いをする者はいないのか!？』

「へー。誰も来てもらえなかったんだ」

扉の方から聞こえた。

姿を現したのは御坂だった。

『よお。気絶していた御坂さんじゃないですか』

「お土産を持ってきたんだけどなー。人の髪留めで自分の手に穴を開ける人」

言い返されてしまった。

『ども、すいませんでした…』

結局俺は謝った。

「わ、解ってればいいのよ」

そう言って持っていたお見舞いの品をくれた。

『板子ヨ』…』

「ほら、あんた喜んでいたじゃない」

『ありがとうございます！』

一礼。

そして、早速いただいた。

「お見舞い来た人の前でたべるってどうなのよ」

『さあ？』

食べながら答えた。

そして、食べ終わった。

『じつそうちまでです』

「そういえば、あんた。よく、あれを止めたわね」

(あれ？あれって…ああ、化物か)

『俺もとつくに限界来てるって思っていたけど……。なんだか限界の一線を越えた気がする』

俺もあの時のことは解らない……。御坂が倒れるのを見ると怒って能力を使っていたことくらいしか感じていない。

「もしかして、レベル上がっているんじゃないの？」

御坂は面白そうに言った。

『やめてくれ、目立ちたくない。最近テレビとか出てて色々面倒なことあるのに』

俺がつぶやくと。

「面倒なことって？」

食いついてきた。

『無能力者の集団に襲われたり、周囲の目とかがね……』

「なんだそんなこと？」

（あっさり、いったぞ！？）

『ほ、本当！？』

「集団は気にせず倒しちゃえ……」

『ハイ！ストップ！』

「なんなのよ」

(ちょっと、待て。何だ今の回答は危ないだろ)

『なに！倒すって！毎回、そんな方法かよ』

「ちゃんと手加減してるわよ！」

(そういえば、合った時も手加減していた…様な気がする)

「あんだねえー…」

『も、もうひとつの方は！』

電撃が来る前に話題を変えた。

「周囲の目はその内気にならないよ」

『そうですね。お嬢様学校いつてますからね』

言葉を誤ったことを知った時は気絶した時にだった。

あ、ちなみに殴られて。

間違いに気づいた時（後書き）

間違いに気づいた時にはすべては手遅れだった…。

電撃で気絶していないのは病院のものが壊れているとまた大変だから…。

ちなみに次は一方通行編かオリジナルどっちがいいですかね？

（意見を聞いているので必ずしもどっちかになるということはありません）

ガキ

退院した俺はギブスをしての生活が始まった。

俺はギブスをしたまま町を歩いた。

『はあ……』

俺は自分が住んでいるところにまっすぐ向っている。

(片腕使えないし……。何か嫌なことに巻き込まれる前に帰ろう……)

「見つけたわよ！」

聞き覚えのある声に、不幸だと感じ始めた俺は振り返りたくないっと思っただ。

しかし、声の主は俺の肩を掴み自分の方を向かした。

「あんたよあんた」

(別人ですよー。他人の空にですよー)

心の中でそうつぶやく。

『おはよう……』

「おはよう。それであんたに髪留め貸したこと覚えてるわよね」

『もちろんだ』

もちろん覚えてる。っというか、覚えていないっと言ったらこいで死ぬ気がする。

「じゃ、それのお礼に新しいの買いなさいよ」

『…』

どついう関係があるんだ…。

『どついう関係が？』

「ないわよ」

『じゃ、御坂。また今度な』

いつものペースで逃げようとしたら思いっきり肩を掴まれ後ろに引き戻される。

「買って貰うの解った？」

御坂の髪の毛あたりからバチバチっとなら聞こえたあたりから俺の身の安全が第一だと解った…。

『解りました…』

俺の退院日は祝われることもなく終わりそうだ。

とぼとぼと御坂の後ろについていく。

『っで、何を買えば良いんだっけ？』

「髪留めよ。ここでいつも買ってるのよ」

俺はこの場所を見たことある……。っというか忘れるはずがない……。

俺のくだらない日常が終わりを告げた時。

爆弾事件のデパートだ。

「じゃ、行くわよ」

そうして、向ったのは女性の服などが並んでいる場所……。

「御坂。俺いらいんだが」

周りの視線がいたい……。

特に女性の定員とか……。

何でこんな小物売り場と女性の服の売り場が一緒なんだよ。

俺は一瞬でも早くこの場から逃げたかった。

「どれがいいかな……」

御坂さんは俺に買わせるものを探していた。

(いや、前使ってたのと同じで良いんじゃないんですか……)

俺の思いは通じるはずはなかった。

結局10分くらいその場で待った。

「これにする」

御坂が持ってきたのは…。

いつもの髪留めだった。

俺はため息をつき、

「はいはい、解りました」

そして、レジに持って行って購入する。

「さて、買ったぞ」

「これで良いのよ。これで」

そう言って受け取る御坂。

「さて帰るか」

二人はデパートを出ようとした…。

出口付近の子供のための売り場で御坂が足を止めた。

足を止めたことに気づき、振り返る。

「ん？御坂どうした？」

「なんでもないわよ」

慌ててこっちに来る御坂。

何を見ていたのかなつと俺は御坂が見ていたほうを見る。

最近人気のかえるのマスコット。

ゲコ太のヘアピン。

「欲しいのか？」

御坂に聞く。

「あ、あんな子供ぽいのいらないわよ」

俺はため息を再び出す。

そして、店に入って行き。ゲコ太のヘアピンを購入する。

「あんだ…」

「好きな物を無理に我慢するよりガキのまま俺は良いと思つて言っただろ？」

そう言つて無理やり御坂にヘアピンを渡した。

「…ブツブツ」

何か御坂が言った気がしたが俺には聞こえなかった。

「なんだって？」

「なんでもないわよ」

歩き出した御坂に着いていく。

この日はまだ終わらない。

ガキ（後書き）

インターンシップが始まったぜ。更新不可能かも

絶望

俺たちは帰ろうとしていた。

(やつと、一日が終わる…)

そんなことを思いながら歩く。

その時、横を向いた俺の目には御坂が見えた。

(え？)

驚いた俺は立ち止まり目の前にいる御坂を見た。

御坂は俺が立ち止まったことにも気づかず先に進む。

(気のせいなのか？)

少し考えた後に御坂の後を追った。

「 ちょっと、どこ行っていたのよ？ 」

追いつくと訳を話す。

『 そういうことだ。妹とかいるのか？ 』

のんきに聞いてみると御坂の表情に焦りが見えた。

「 ちょっと、その見間違えた子はどっちにいったのよ！ 」

御坂が焦っている…。

『あ、あっちだ…』

俺は指で来た方向を指す。

「私用事あるから」

適当なことを言って指を刺した方に走っていく。

『待てよ!』

俺は御坂を追う。

数分後

『見失った…』

(何て早さだよ…)

「やあ、探したよ」

聞き覚えたのある声。

加嶋 孝太だった…。

『お前…』

空気使いであり『プラスター』という無能力集団の頭…。

「急いでるようだが。僕の相手をしてもらっよ」

『お前と急いでる暇はないんだがな…』

「まあ、言っなよ。この電話を取って少しは考え直せって」

そう言っって投げられた携帯を俺は受け止めて耳に当ててみた。

>…ほら王子様からの電話だぞ<

(何だこれ…)

>嫌!…のには出ない…よ!<

(!?)

今の声かすかにしか聞こえないが確かに佐藤の声だった。

『おい!何やってんだ!』

怒鳴ると通話は切れた。

「どっどっですか?」

『お前…』

睨みつけるように加嶋を見つめる。

「簡単なことですよ。もう一度勝負して、あなたが10分いないに

僕のポケットから地図を手に入れてその後その場所に行くだけですよ」

『10分以内…』

「ええ。今の通話が切れてから10分ですよ」

『つち…』

周りに水を生成する。

「そういえば、地図は水で消えるインクで書きましたから」

(こいつ…!)

俺は水を地面に落とす。

「それで良いんですよ。ちなみに…。時間内に助けられないと…」

俺の感が危険を感じた…。

「あの女の子を殺しますよ」

体温が凍りつくように下がっていった。

『貴様!』

一気に怒りで体温が上がる。

「ハハハ! そうだそれでいい!」

『目的が俺なら俺にやれば良いだろ!』

俺は駆け出す。

「それじゃつまらないんだよ!」

空気が俺の行くてを邪魔する。

『くそ!くそ』

何度も加嶋に突っ込むが空気が邪魔で近づけない。

「ほら、3分たちましたよ」

『はあ...はあ...』

加嶋はその場から動いていない...

(能力であいつの脳をやるしかない...)

そう考えた時。

「そうでした。もしも前みたいに脳に攻撃するところこの監視をしてる仲間が連絡して彼女を殺しますよ」

まるで予測したかのように言われた。

絶望（後書き）

一方通行と共にオリジナルの方を進行！
次回、どうなるかなんて俺にはわからない！

無力

「そろそろ、五分たちますよ？」

時計を見て加嶋はそういつた。

体中に痛みが走る。

(もう……。何度目だ？無理なのか……?)

俺は心が折れそうだった。

『まだだ……』

それでも俺は立ち上がる。

「そろそろ諦めたって良い……」

『黙れ!』

加嶋の声を遮る。

『俺は……。俺が諦めるかよ!』

再び、加嶋に向って走り出す。

背中から水を出して加速する。

「無駄なのにな」

再び加嶋の能力で空気の壁が俺を阻む。

だが、水の加速で俺はあと少しのところまで近づいた。

『があああ！』

声にはならない。

「つく…」

加嶋が後ろに下がろうとした瞬間。

右腕の肘から水を出し勢いをつけて加嶋を殴る。

「があ…」

『つく！』

加嶋は殴られて転がり、俺は加嶋の能力で飛ばされる。

地面を転がっていくがすぐに立ち上がる。

（チャンスは今だ）

『はああ！』

再び駆け出す。背中から水を出し。加速して加嶋に近づく。

「つく」

加嶋は地面を軽く蹴り宙に飛び空中で止まる。

『!?!?』

「これは誤算だったな……」

そう言っただけで飛びながら去ろうとした。

『逃がすか!』

俺も飛ぶ。

「落ちろ!」

空中で空気が俺の邪魔をする。

『通せ!』

空気に激突する。

突破する。

『お前が落ちろ!』

俺の右の拳が奴の顔面にヒットしそのまま下に落ちていく。

「があ!?!?」

俺は加嶋の上に落ちた。

気絶していたのか何も言わなかった。

『そうだ…。地図だ…』

俺は加嶋のポケットの中を調べた。

一枚の紙がでてきた。

ちゃんとした地図になっていた。

その場所に急いだ。

2分かけてたどり着いた。

直っていた左腕だが痛みが戻ってる。

目の前には小屋があった。

『はあはあ…佐藤!』

勢い良く扉を蹴り破ると…

『こんなことって…』

その場にはナイフが胸に刺さって血を流している佐藤がいた…。

『佐藤…』

返事はない…。

『佐藤！』

怒鳴ってみても何も答えてくれない。

『うう…』

瞳から涙が出てくる。

『あああ！』

俺はその場に倒れこんだ。

無力（後書き）

死んじゃったね…。

次回、当たりで作品として崩れ始めるかも知れません…。

注意が必要です！

作品が崩壊した話（前書き）

ああ！やってしまった。

作品が崩壊した…。

もう、この話で読む人が減っても悔いはしない！

作品が崩壊した話

俺が呼んだ救急車と警察が到着する。

事情徴収を受けた後、俺は開放された。

『何やってんだろうな俺…』

(俺には何も救えない…)

曲がり角で人とぶつかる。

『すみません』

「いや、こっちこそ…」

どちらも走っているわけじゃないので倒れることはなかった。

「ん？翠？」

『当麻か…。こんばんわ』

自分でも暗い挨拶だなっと思った。

「大丈夫かよ。元気ないぞ」

『ああ、帰って眠るよ』

そう言って当麻の横を通って行く。

「じゃ、また明日な」

俺は自室に帰り着替えもせず。布団の中に潜り眠った。

次の日…。

俺は加嶋を探した…。

理由はもちろん。敵討ちだ。

(罪人には…。死を…)

俺の中には殺すという感情しかなかった。

「おい！」

後ろから肩を掴まれた。

俺はとつさに反撃の体勢になる。

「怖い顔するなよ…」

後ろにいたのは当麻だった。

『何だ…。当麻か…』

握った拳を下ろす。

「なんだか変だぞ…」

真剣な顔で言う当麻。

『そんなこと…!?!?』

ないつと言おうとしたとき当麻の後ろに加嶋の後ろ姿があった。

『邪魔だ!』

目の前の当麻を押しつけ前に進もうとする。

「わあ!?!?」

突き飛ばされた当麻はその場にこけたがそんなこと関係ない。

『かあしまあああ!?!』

叫びながら殴る。

「があ!?!?」

後ろからの襲撃に加嶋は何もできず、その場に倒れる。

倒れた加嶋に乗りかかり俺は何度も殴る。

『佐藤は佐藤は!』

何度も殴るうちに加嶋に止められる。

「ハハハハ!死んだか!」

加嶋は佐藤の死を笑った。

『殺す。殺す！』

掴まれていない手で殴る。

それが空気により弾き飛ばされる。

勢いが強い空気の流れて俺は宙を舞う。

地面に落ちる前に能力で水を生成するっが…。

(うまく生成できない…！？)

「っと…」

地面に落ちる前に当麻が俺をキャッチした。

「冷静になれよ。何があっただよ」

当麻が何かを言った様に思えたが気にしなかった。

『…殺す』

つぶやく。

「え…」

当麻から離れる。

『殺す。殺す!』

「おい!」

当麻が再び俺を止めるために掴む。

『バリッ』

能力が消される。

『当麻どいてろ…』

「何があつたか知らないが…。今のお前は見過ごせない」

「ハハハハハ!お前も俺も同類だよ」

そう言つて加嶋は走り去つた。

『かあしまあああ!』

後を追おうとするが、

「冷静になれつて!」

後ろで当麻が俺を止める。

俺はどんどん悪い方に走っていく…。

『当麻…。お前もあいつの仲間なのか?』

旧友まで信じられないほどになっていた…。

「!?!」

俺は当麻の腹に肘をぶつけた。

「翠…。お前!?!」

俺は堕ちて行く…。

作品が崩壊した話（後書き）

さあ！悪人になったよ！

最初の主人公の設定の

お人よし

気まぐれにあきやすい

とかもあやふやですしね…。

駄作でごめん

V S 最強の無能力者

俺は拳を構える。

そして、殴る。

『ツチ』

当たる寸前で避けられた。

「翠、やるしかないか…」

当麻も拳を構える。

『はああ!』

殴りかかるが逆に殴られる。

『つく!』

「翠! やめろ!」

倒れはしない。

(厄介な相手だ…。能力は通じない、身体能力も向こうが上だ…)

背中から水を出して、加速し勢いをつけて殴りかかる。

当麻はしゃがんで俺の拳を避けた。

(通じない…。俺の攻撃が…)

「何があつたか知らないが…」

俺は右手を右に伸ばし右手から水を出す。

「お前が止まらないなら」

左に転がりながら着地する。

「俺が止めてやる!」

すぐに立ち上がる。

『やれる物ならやってみな!』

当麻が先に動いた。

右左と素早いパンチが繰り返される。

俺は避けながら蹴りを入れる。

それを両手で受け止めらる。

(やば!)

当麻は俺の片足を持ち上げ、バランスを崩した俺は倒れる。

倒れる時に、体をねじる。

俺の足は開放される。

そのまま手で体を前に押しやり、当麻の足を蹴る。

「う…」

ひるんだ隙に立ち上がる。

拳を構えて肘から水を出し勢いのあるパンチ。

それを当麻は受け止めた。

『な!』

(俺の全力が…!?)

「歯を食いしばれ…」

(離れないっ…)

動こうとしても当麻がしっかりと俺の拳を掴んでいるので動けない。

「うわあああ!」

当麻の全力のパンチが俺の胸に当たる。

『がぁ!?!』

一瞬空気がすえない感じがした。

そして、転がる。

止まると深呼吸をする。

「もう、いいだろ……」

悲しい声で当麻が言った。

（まだだ……。あいつに思い知らさないと……）

立ち上がるうとするが足が言うことを聞かない。

（そうだ……。左腕を狙えば……）

俺が能力で攻撃をしようとしたとき……。

『ブシユウ！』

自分の左腕から大量に血が出た。

『うわあああ！』

頭の中に1つの言葉が思い浮かぶ。

（能力の暴走……！？）

「翠！？」

当麻は一瞬驚きながら右手で俺のを掴む。

『バリン』

イマジンブレイカー
幻想殺しによって俺の能力の暴走が止まる。

『はあ……はあ……!?!』

そのまま体が重くなりその場に倒れた。

意識

(立ち上がらなきゃ…)

『まだ…。終わってない…』

手足に力を込める。

「黙ってる！」

当麻が耳元で怒鳴る。

左腕を動かそうとすると激痛が走った。

『うわあああ！』

自分の左腕が真っ赤だった。

能力が暴走した結果だった。

そこで俺の意識はなくなった。

『じじは…』

目が覚めると見覚えのない場所だった。

ベッドの上でどうやら病室らしい。

「起きたか」

隣にツンツン頭の少年が座っていた。

『うん…』

返事だけはするが少年を良く見つめる。

「どうした？まだ、痛むか？」

心配そうに少年が声をかける。

『いや…。あなたは誰？』

「え？」

(解らない…。この少年は誰なんだ？)

『一体誰ですか…』

「翠、お前まさか…」

(ツンツン頭が言った翠とは…。俺の事なのか？)

『翠ってのは僕の事？』

side 当麻

俺は信じられない。

俺と同じ用に翠が記憶喪失になっているなんて…。

「本当なのか…」

小さく言った。

「本当にわからないのか？」

『ごめん…。思い出せないんだ…』

目をそらして翠が言った。

「ちくしょう…」

俺はあの時、翠を止めたことによってこんなことになるなんて思っ
ていなかった。

「お前の名前は流雅 翠だ」

『流雅 翠？』

「そして、俺は当麻」

少し、少しずつ俺は翠に教えていった。

『能力？水を操る？』

「ああ、そうだ」

翠は理解できていない用だったが右手の指を広げておいてある水の入ったコップに向けた。

顔が集中してるように見えた。

『そんなことできるなんて…。信じられないよ』

少しずると言った。

流石にすぐに能力までは使えない。

「こんな時間か、俺は帰らなきゃな」

(インデックスが噛み付いてきそうだからな…)

『ごめん。僕のせいで…』

「いや、いいよ。お前の方が困ってるんだし」

そう言って俺は部屋を出た。

s i d e E N D

意識（後書き）

ちなみに、記憶喪失の話しか出てませんが左腕は再び包帯でぐるぐる巻きにされています。

まあ、暴走してこのおち……。駄作だな……。

俺から僕に（前書き）

訂正：最後の一人称が俺になっていたもので僕に戻しました

俺から僕に

(上条当麻……。僕の友達だと言う人……)

翠は去っていた当麻のことを考えていた。

(どうしても思い出せない……)

(能力の事も全く解らない……)

「気分はどうかね？」

白衣を着たカエル顔の医師だ。

『正直、不安な気持ちでいっぱいです』

「君の場合だと、一時的な記憶障害だと言えないんだ」
いきなり病気の話をする。

『そんなに深刻なんですか？』

「君の場合、能力の暴走をしたときに脳にダメージを追っている」
『水を操るだけなのにですか？』

「うん。脳の周りには水があるからね。そのせいだと思うよ」

(確かに人体の中はほとんどが水なのだから当然か……)

「それで君の記憶が戻る可能性だけど残念ながら難しいよ」

『そうですか…』

記憶が戻れば、この不安な気持ちから開放できると思ったが…。

「左腕の方だけど、もうすぐ完治するから完治したら退院ね」

『ありがとうございます』

俺は病室から出て行く医師に頭を下げる。

（退院か…。普通の人なら喜ぶだろうが俺にとっては未知の世界に
でる感じだな…）

退院すると俺は自分の部屋を目指した。

場所は冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）っと名乗る医師に教えても
らった。

扉の前まで来た…。

（汚い部屋だったら嫌だな…）

開けると汚くもなく普通の部屋だった…。

ほっとした僕は部屋の中に入っていき少しくつろいだ。

医師が言っていた言葉を思い出す。

「君の記憶はふとしたことで思い出すかもしれないからね。ちょっと歩き回るといいかもしれないよ」

(歩き回るか…)

僕は部屋をでて、そこらを歩きまわることにした。

俺から僕に（後書き）

短い！非常に短い！

しかし、今思いつくのはここまで…。

急展開

(ふふふ…。ハハハハ！)

今僕は、全力で逃げている！

なぜか、僕は不良に狙われている…。

「くそ！どこに行った！」

「近くにいる！探せ！」

僕は普通に町を歩いていると追いかけられた…。

昔の僕は何をしたんだろう…。

「ん？翠、何やってんだ？」

後ろから声をかけられた。

『うわああ！』

驚きながら前に逃げる。

「いたぞ！」

「こつちだ！」

あちらこちらから不良が集まる。

「おいおい、そんなに驚くなよ」

僕の後ろに入た少年は周りとは違い冷静だった。

「やっちまえ！」

一人の合図で全員が動き出す。

『た、助けて！』

僕が叫ぶと、

「「うわあああ！」」

不良たちは宙をまった。

「何やってんだ？お前ならこれくらいなんともないだろ？」

不思議そうに少年が言った。

『あ、ありがとうございます…』

「ん？なんだよ。礼儀正しくして、それでも翠か？」

どうやら昔の自分を知ってるようだ…。

『あの…』

僕は事情を説明する。

少年は驚きながらも解ってくれた。

少年は健一と言い。

僕の知り合いのようだ。

「じゃ、何かあったら言えよ。早く記憶戻るといいな」

『あ、うん』

そう言っつて健一は去った。

僕は不良たちが倒れてる。その場所をすぐに去った。

(健一は良い人だったな……)

そして、通りを歩いていると……。

後ろから肩をつかまれる。

『!?!?』

後ろを振り返ると黒服でマスクをしている。

怪しい人が肩をつかんでいた。

そして、口に布を当てられる。

(やばい…。意識が…)

そして、僕は眠った。

急展開（後書き）

短編多いな…。

覚醒（前書き）

まあ、ありきたりな内容。

覚醒

目が覚めるとそこはコンピューターばかりが見える。

(どこかの施設?)

とりあえず動こうとしてみたが、両手両足には金属のような物で固定されている。

(どこかの小説の世界だね…)

できることなら現実逃避を試してみたかった。

「目が覚めたね」

僕の身長のお半分くらいのお爺さんが尋ねる。

そのお爺さんは白衣を着ていて、ここの管理者ですよって雰囲気が出ていた。

とりあえず僕は

(寝たふりをしてやり過ごすぞ)

再び目を瞑る。

『うわあああ!』

頭に電気が流されたかのように痛む。

「正直じゃないな」

僕が苦しむのをニヤニヤしてみている。

『はあ……。はあ……。』

「どうだい？学園都市の化物をやっつけた英雄さん」

（化物？英雄？記憶のある僕の話か…）

『残念だけど……。僕は記憶消失で、何のことかわからないよ』

正直に答えた。

『うわあああ！』

再び電気が流れる。

「嘘はダメだよ。そんなことが通じると思ってるのかい？」

（うまい話だと僕も思うよ）

「まあいい、目覚めていれば」

その言葉が妙に気になった。

爺さんが機械を操作すると上からヘルメットのような物が僕の目の上当たりまでかぶらせた。

『何をする気？』

怒っていても冷静に聞く。

「レベルアップ幻想御手と同じ様な物だよ」

幻想御手つと言われても僕には全く解らない。

首を傾げようとしたがかぶさっている物が僕の頭を固定していて無理だった。

「用は、君の能力を使えるようにするのさ」

(君の能力ついていわれても…。今使えないんですけどね)

「君の能力はすばらしいよ。人体の血液でも操るんだよね」

自分の能力を知らなかったが…。その言葉の意味は解った…。

(それって…。体内の血液を体外に無理やりだそうとすれば…)

「そんな能力があれば、証拠も無く人を殺すことなどたやすくなる」

『そんなこと！』

「君だって、初めて能力を使ったときはそうだったんだろ？」

どくん…。

「能力の暴走って事になってるけど実は狙ってやったんじゃないの

かい？」

どつくん…。

鼓動がドンドン早く、強くなっていく。

「ほら、こんな風だったね」

目の前に映像がながれ始める。

>やめる！<

聞き覚えのある自分の声…。

その後、周りに入った人の腕から血が飛び出す。

「うわわあああ！」

「ちょ、超能力者！」

「ば、ばば、化け物！」

腕から血を流して去る。

「ほら？思い出したかい？君の過去を」

ケタケタと笑いながら言った。

だが、そんなこと気にならなかった。

僕の頭の中には

(これが過去の自分の姿なのか?)

その疑問しかない。

「さあ、どうだったんだい!？」

叫ぶように爺さんが聞く。

『わああああ!』

気分が悪くなりすべてを吐き出すように叫ぶ。

周りに水滴が現れる。

『はあ……はあ……』

「ひい!」

(意識が飛びそうだ…)

下を向いていた顔を上げると水滴は空中で留まっている。

(これが超能力!)

爺さんはコンピュータのどこまで行き操作をする。

『うわあああ!』

再び流される電気。

「データは取れた。死ね！死ね」

ドンドンと痛みが増していく。

薄れていく意識の中。

『僕は…。僕はまだ死なない！』

空中に留まっていた水滴が動き出す。

（操れる！能力を！）

空中の水は集まりコンピュータに水をぶつける。

思った以上に水の飛ぶ速度が早く。そして、威力があった。

「ああ……」

一撃で壊したコンピュータの前で爺さんは座り込むように倒れてる。

コンピュータが壊れたことで電気は流れなくなった。

僕はもう一度、水を作る。

時間がかかったがコツはわかってきた。

それを固定している金具の固定部分にぶつけて壊す。

『ふう…』

(腕に当たったらどうなったんだろう…)

やった後に恐怖が押し寄せて来た。

そして、お爺さんのところに寄っていく。

「く、来るな！来るな！」

起き上がり逃げていく。

逃げた先が運悪く四隅だった。

『悪いが、やられたらやり返させてもらおう』

左手を広げてお爺さんに向ける。

「悪かった。私が悪かった！」

『はあああ…』

左手を引き、気合をこめた右手で殴りかかる。

ように見せかけて寸止めた。

「あわわわ…」

爺さんは、跪いて気絶した。

『さて…。警察かな？』

携帯を取り出そうとしたがポケットに無いので爺さんのポケットを調べてそれを使って警察を呼んだ。

覚醒（後書き）

さて、一方通行までは話を進めて完結させたいって思っていたが…。

だいぶ、それてますね…。

後々修正できたらいいな…。

「ゲームスタート」

警察は簡単に来てくれた。

「いつもありがとうございます」

警察に綺麗なお辞儀を見せてもらった。

（さて、ここで問題ができた「いつもありがとうございます」「ってなんだ？俺は昔何やってたんだ？）

そう思いつつ胸の奥にしまう。

『ひとつ良いですか？』

「なんですか？」

僕が質問すると快く聞いてくれる。

『自分、記憶なくなっただんですけど…。記憶の前もこんなことやってたんですか？』

「え？」

警察の方が驚く。

『いや…。記憶なくしました』

「それって大変じゃ…」

『大変ですよ』

「…」

(どう反応すれば良いのかわらなくなったな…)

『冗談ですよ。それじゃ、僕はこれで』

っと、言って立ち去る。

立ち去った後に思ったが事情徴収とかいいのだろうか？

ぶらぶらしていると自分の見たことある道に戻れて無事家に帰った。
どうやら近い場所だったようだ。

次の日

朝食を食べながらテレビを見ていると事件は起こった。

<前日、凶悪犯罪者「西川」が逮捕されました>

画面には昨日の医者が出ている…。

(ああ。凶悪犯罪者さんでしたか…)

そんな風に安心したら…。

>バリン！<

家の窓が勢い良く割れた。

『うわぁ!?!?』

驚いて椅子に座ったまま倒れる。

破片に気をつけながら立ち上がるとそれまで俺だけだった部屋に侵入者がいた。

「手を上げてもらおう」

侵入者は俺にそういった。侵入者を見ると男性で黒いスーツに黒のサングラス、手には黒い塊…。銃を持っている。

『どちら様?』

そう言いながら手を上げる。

「君の知らない者だよ」

男はそういった。

(記憶ないから大体が知らないんだけどね…)

「さて、付いてきてもらおう。能力を使おうと思わないことだ。私以外に君を狙っている者は入るのだよ」

『何が目的だ?』

「西川が取り損ねたDNAマップかな」

(DNAマップ?)

遺伝子やそんな物をさすことは予測できるが…。

『なぜそんな物を?』

「君が知る必要はないよ」

聞いてみたが当然教えてくれはしない。

『ですよね…』

つと言いながら相手が持っている銃を能力で作った水で包み込む。

「やはり、抵抗するか!」

(これであの銃は使えない)

男は使えなくなった銃を俺のほうに放り投げて一気に走ってくる。

銃をしゃがんで避けた俺は自分の足元にある椅子をつかみ下から上に上げるように振る。

男は後ろに避ける。俺は避けられた瞬間に椅子をつかむ手を放す。椅子は俺の後ろに落ちてどこかが折れたような音がした。

(新しいの買わないとな)

僕が殴りに行くと男はしゃがんで右足で俺を蹴っていた。

『つく』

男はバランスを崩した僕を追い討ちするようにアッパーをする。

『があ！？』

口の中で血の味がする。

倒れると割れているガラスで頬を少し斬った。

「麻醉か何か持ってこればよかったな」

男はそんなことを言いながらゆっくり近づく。

(どうする？逃げるなら窓は無理だからドアか…)

僕は立ち上がりドアに向って走る。

男は僕の後を追う。

ドアに水を作り出しこちらに向って勢い良く噴射させる。

それをしゃがんで避ける。後ろの男は僕の体が邪魔で見えておらず急なことに反応できず勢い良く噴射された水に少し吹き飛ばされる。

同時にドアは水の噴射の勢いに負けて外れた。

外れた瞬間に噴射をやめ、出口に向って走る。

外に出たところ、足に何か当たり転倒。

(うそだろ?)

そして、頭の上に冷たい何かを突きつけられ。

「ゲームオーバー」

そういわれた。

「ゲームスタート」(後書き)

まあ、タイトルは超関係ないですね。最後にゲームオーバーってあるならスタートあったほうが良いかなって思っただけです。前回に引き続きオリジナルの話です。後3話くらいこの話で行こうと思います。

闇の中へ

『くそ…』

起き上がるつとすれば背中を思いっきり踏まれる。

『があー！』

「ゲームオーバーって言ってるんだろ？」

背中に足を置いている奴が怒ったように言う。

さらに腕に針を刺される。

『ああ！何なんだよ…』

この怒りを誰に向ければ良いのか僕には解らない。

「こいつから血持って帰れば良いだろ？」

(血？DNAマップか…？)

「血を取ってくるとか言っていたがどうやってDNAマップを作るのやじ」

後ろでずぶぬれの男が来る。

同時に針が抜かれる。

(どうにかして逃げないと…)

僕の周りに水を出し…。

「いい加減諦めろ」

>バリン<

僕の周りを飛んでいた水が消えた。

それと同時に背中に乗っている足が無くなる。

「人の知り合いの家に来て見れば、友達を踏みつけて何やってるんですか？」

「つぐ！」

僕の横に倒れる黒いスーツに銃を持った男性。

ぬれていないことを見ると部屋に入ってきたのと別人だとわかる。

「誰だ！？」

「こつちが聞きたいね。誰なんだ翠？」

立ち上がって相手を見てみるとそこにいたのは上条当麻だった。

『知らないよ…。当麻さん』

当麻さんと言われて残念そうな顔をする。

針を刺された方の腕がずいぶん痛む。

「っち、血は取ったんだ行こう」

ずぶぬれが言う。

そしたら二人は逃げていった。

「まて！」

当麻が追おうとする。

僕は能力で持つていかれた血液を操ろうとするが…。

>バタ<

(あれ？何が起きた…？)

急に体が倒れた。

目の前から倒れたのでコンクリートの地面に頭から激突。

「翠どうした！翠！」

当麻が追うのをやめてこちらに来る。

『大丈夫…。ちょっと、ふらつていただけだから…』

立とうとするがうまく立ち上がれずまた地面に倒れる。

『ははは…。ちょっと、立ち上がるの無理かも…』

どうしてしまったんだ僕の体は…。

壁にもたれかかって休む。

「どうしたんだよ一体…」

『解らない…』

少しの間で2組は姿を消した。

その後も大変だった。

部屋の修理をしてもらったり、警察のお世話になったり。病院での検査もされた。

すべてが終わったのは2日後である。

夜に修理の終わった自室に向うが…。

>ドガシャ！<

何か金属が落ちた音がした。

（危なそうだな…）

その程度にしかそのときは思わなかった。

>ダンダンダン！<

この銃声が聞こえるまでは…。

（この都市は何が起こってるんだ！）

銃声のなった方に走る。

人間という化物

銃声のなつた方に來たが誰もいなかった。

(気のせいかな…?)

最近銃をよく見たりしているから銃声だと思つたのか…。

何もないので帰ろうとした時…。地面に落ちている血痕を見つけた…。

(どうして、厄介ごとがいっぱいおきるのかな…)

地面に落ちている血痕を探しながら進む。

>ドツゴオオツオオ!<

(銃声の次は爆発か!一体なにがおきてるんだ!)

爆発があつた場所に来て見ればそこは線路や列車があつた。

「ギアーンねん!」

大声が聞こえる。

聞こえた方を見れば

「テメエの考えはてんの的外れなんだよオ」

少年が少女の足をつかみ…。

引きちぎった。

(な…)

僕はとつさに動いた。その場から、100以上の水滴を作り出し勢い良く少年のほうに飛ばす。

少年に水滴はすべて命中したようにみえたが…。

水が少年に弾かれて逆の方向に飛んでいく。

「ああ？」

少年はこちらに気づいてこちらを向く。

『嘘だろおい…』

少年に触れる寸前から水の行動が操れなかった…。

「ツチ、実験を見られたからにはよオ。抹殺てかア？」

相手は僕より先に動いた。

一歩地面を踏んだだけのように見えたが弾丸のような速さで俺の目の前まで来ていた。

(早い!?)

目の前の少年が地面を強く踏むと

地面が爆発したかの用に思えた。

石つぶてがショットガンの玉のように飛んでくる。

『つぐ……』

両手で頭を守る。

「はっはアッ」

楽しげに笑う少年。

大きな石が僕の頭に激突する。

『ああああー!』

頭から血が流れる。

「どーした。終わりかア！」

少年がなにか言うが全く頭に入らない…。

頭が割れるような感じた…。

何かが頭のなかに入ってくる…。

「もオいいか、終わりにしてヤンよ」

はつきりと思い出した。

少年は列車に近づき細い腕で列車を投げた。

俺は投げた列車を作り出した水を打ち出して迎撃する。

『まだだよ』

頭を支えながら立ち上がる。

(記憶消失になっているんなことが起こっていたみたいだな…)

俺は自分の記憶を取り戻した。

今までであったことも全部覚えている。

「ツチ、さつさと楽になりやいいのによォ!」

少年が再び飛び出そうとした時、

>ガガガガガガ<

強い電撃が少年の周りを襲った。

「ああああああ!」

それは俺もよく知っている者の叫び。

御坂美琴の…。

怒りに身を任せて地面の中の砂鉄を集め砂鉄が少年を襲う。

「スゲエスゲエ。新ワザかア？」

少年は楽しげに言う。

先ほどまで相手していた俺や少女は無視して御坂と戦う。

その間に俺は少女の手当てをしようとする。近づくと……。

『そんな、馬鹿なことが……』

片足を失って倒れているのは……。

御坂だった……。

人間という化物（後書き）

主人公の記憶が戻ってきていますが、すごくどうでも良い感じにスル
ーしてますね…。

計画（前書き）

今作品では御坂って言葉が出まくっていて読みにくいので注意してください。

計画

驚きながら怒り少年と戦っている相手を見る。

紛れも無く御坂である。

そして、倒れている少女も御坂である…。

(一体なにが…)

そんなことを考えている間に御坂と少年は激しい戦いを繰り返す。

何か喋っているように思えるがこちらには聞こえない。

(まずは…。血を止めないと…)

能力をつかい倒れている御坂からでる血を止める。

(これで何とか持つか…。っち、カエル先生の病院まで遠いぞ…)

とめることに集中しながら先のことを考える。

「無駄ですよミサカは正直に答えます」

背中から聞こえた声にゾクっとした。

振り返ってはいけない気がしたが振り返り現実を見ることも大切なのである。

後ろには大量の御坂がゴーグルをつけていた…。

「何だよこれ…」

「九九四号はたった今、死にました」

(何を言っている？九九四号？倒れている奴とでも言っているのか？)

恐る恐る。首に手を当てると呼吸をしていなかった…。

「こんなことが…」

思い出す。記憶を失う前の出来事。

佐藤が死んだつと…。

「何なんだよこれ！」

叫ぶが御坂たちは俺をかまわず少年達の方に向つ。

俺もそれを追いかける。

「そんなモノのためにあの子を殺したのかー！」

御坂が放つ全力のレールガン。

俺の水でもあれを防げない。

音速を超える速度の弾丸は御坂のすぐ横のレールに当たる。

(何があった…。いや、なぜ、放った側に返ってきた?)

「人殺しみてえに言うなよ。俺が相手してんのはボタンひとつで造れる模造品だけ」

誰もが止まった中少年だけが話す。

「さて…次はこっちの番だ」

少年が踏み出そうとしたときに

「お待ち下さい。計画外の戦闘は予想演算に誤差を生じるおそれがあります。とミサカは警告します」

一番先頭の御坂が言う。

その後、御坂たちが個別に喋りだす。

計画つという言葉が多く使われているのだけは解った。

「ツチ。分かった、分かった。分かりました。ちょっとからかっただけだつてのリレーしてしゃベンな気持ち悪イ」

どう見ても本気だったが少年は戦うことをやめたらしく歩き出す。

ゆっくりと御坂に近づきながら。

「そーいやア自己紹介がまだだったな。オマエのクローンにゃ世話になってんぜ」

(クローン…。その技術があると聞いていたが…。実際に見ると信じがたいものだ…)

「俺の絶対能力者(レベル6)化を手伝ってくれたんだ。感謝しなきゃな」

(手伝う?こいつは何様なんだ…。いや…。この学園都市で最もレベル6に近いつて言ったら…)

「アクセラレータ一方通行だ」

学園都市最強の名。

(あらゆるベクトルを操る…。だからレールガンは反射されて…)

一方通行は御坂に耳打ちするように「よろしく」っといって帰って行く。

御坂は肘から地面に座り込む。

御坂たちは後始末の相談をし始める。

俺には何も言えない…。

「アンタ達…何なの…?どうしてこんな計画に付き合ってるの?死ぬのよ?」

拳を握り締める。

「生きてるんでしょ!?!アンタたちにも…あの子にも!」

あの子とは死んでしまった子のことだろう…。

「ミサカは計画の為に作られた。模造品です」

御坂は御坂にたんたんと言う。

「実験動物ですから」

何も迷いも無く続ける。

(俺は思ったことがある。自分は何のために生きるのか…。まだ、その答えを見つけてはいないが決して。殺されるためではない…)

その後、御坂は何も考えずにか歩き出す。

御坂たちの方はそんな御坂に見向きもせず後始末をする。

俺は御坂の後を着いていった。

幕間

御坂の後をついて行ったが…。

御坂は道のベンチに座り込んで心ここにあらずだ。

(1人にして帰る事もできないな…)

「御坂気持ちは解るが今日は帰るんだ」

言うのは簡単だが…。

「…」

御坂は返事すらしない。

動く気すらないのだろう。

「はあ…」

(目の前で大切な者が殺されたんだ…。無理もないか…。昔の俺も上条の言葉を無視していたこともある…)

俺は静かに御坂の隣に座った。

夏服にスカートの御坂が寒そうだった。

おれは制服を脱いで御坂の足や手を覆うように乗せて、Tシャツ姿で一度家に帰った。

新品のように綺麗になった家に入って毛布を何枚か持ってさっきの場所に戻る。

(Ｔシャツ姿に毛布を持ってるって…。誰かに見られたら一発で誰かに呼ばれるな)

夜遅くだったので誰にも会うことがなく目的地に着いた。

制服を取り毛布を何枚かを覆わせる。

「ふあつあ…」

(そついや眠いな…)

時間を見れば深夜だ。

俺は御坂の後ろのベンチで横になって眠った。

目が覚めれば御坂にかけてあったはずの毛布が俺にかかってある。

慌てて起き上がり御坂の座っていたベンチを見るがそこには誰もいません。

毛布の上に

>この件には関わらないで<

つと書いた紙が置かれていた。

(何だよ。心配してるのによ…。御坂、大丈夫なのか?)

そして、俺は誰かに見つかる前に家に戻った。

幕間（後書き）

記憶を取り戻した翠の一番の行動とは…？

道標

次の日の朝、当麻に電話をかける。

『八口八口、当麻？』

> 翠かどうした？<

記憶が戻ったことを知らない当麻が心配そうに聞いてくる。

『記憶戻ってな、知らせにな』

> それはよかった。もう大丈夫か？<

あいつの真剣な声が聞こえて、記憶をなくす前の話をしていることを言っているのだろう。

真剣な顔なんだろうな。と思うと笑みがこぼれる。

『ああ、大丈夫。もう道を踏み外さないよ。ありがとう。道を正してくれて』

そう伝えると一方的に電話を切った。

『もう道を踏み外しやしないさ……』

もう一度つぶやき健一に電話をする。

少しの間プルプルっとなり。

>うるさいんだよ！<

っと怒鳴られて切られた…。

静まり返った。

少しすると携帯がなり見ると健一からだ。

>悪い。本当に悪い…<

『いや、良いよ』

>どうかしたか？<

『記憶戻ったよ。世話になったね』

>おお。打ち上げでもするか？<

楽しげに健一が言うが…。

『悪いが協力して欲しいことがある』

これが俺のけじめである。

1時間後、俺と健一が待ち合わせた場所に集う。

「久しいな」

『まあ、記憶のある俺にはな』

真剣な顔で健一が言う。

「本当にやるのか？」

確認を取る。

『ああ、これがけじめだ』

俺と健一は二手に分かれて町を駆け巡る。

2時間ほどして昼食を取ることを考え始めた頃に…。

「…つながるか解ってるよな？」

聞き間違える事できない。

(加嶋！)

目的の人物を見つけて怒りがあふれ出てくるがその怒りを抑えて健一に現在地をメールで知らせる。

送り終われば相手を見たが…。

足元で何人かが息苦しそうに喉に手を当てて倒れている。

「ハハハハ！」

笑う加嶋。

『悪いな…。健一。先に行くぞ』

つぶやいた後、加嶋の前にでる。

『久しいな。加嶋』

軽く睨む。

加嶋の顔から笑顔が無くなった。

能力を使うのをやめた。

吸えなかった空気を吸いむせる。

「復讐か？それにしては期間が開いたな？」

『ああ、待たせたな』

指でいつもの水を出す構えをして加嶋に向ける。

「俺を殺せば、俺と同じだな」

（ああ、そうだな。そんなことはもう、やめだ）

『殺されたから殺し返す？古い考えだ。悪いが捕まえさせてもらおう。ブラスター』

水弾を飛ばす。加嶋はそれを避けることもせずに立っている。

水は加嶋の近くに来ると弾けた。

『空気の壁か』

「弱いな水は空気で守られる。どうだ？脳に攻撃でもするか？」
挑発をする加嶋。

（狙いは俺が集中した時に攻撃か）

脳への攻撃は精密な計算をしてからする。危険すぎるからだ。

『まあ、少し遊ぼうじゃないか』

水弾を出し続けて言う。

道のり

「どうした？水使いその程度か？」

加嶋は俺の打ち出す水をすべて弾きながら言う。

『…』

俺は黙って水を操作する。

「まあ、いい死ね！」

突然、突風が吹く。

前と後ろから同時に…。

『…』

空気の圧を身をもって知らされる。

(何発も食らってられないな…)

一撃で相当なダメージを与えられた。

「確かに俺は空気を俺に集める事と離れさせることしかできない。空気のみの引力斥力だ。だが、同時に使えないなんて事はないか…」

「早いんだよ始めるのが」

加嶋の言葉を少し遮り空から健一が登場した。

『悪いな』

「ツチ。水使いでも一人じゃ何もできないってか？」

加嶋が不機嫌に言った。

「人は助け合うもんだよ」

『ああ、そうだな』

健一は手のひらの上に小さな台風を作り出す。

「行くぞ翠」

『ああ』

俺は水を使って空を飛ぶ。

「何をする気だ？」

健一が竜巻を加嶋に向けて開放する。

加嶋は自分の周りの空気を動かさない事で竜巻を止める。

「引き寄せたりできるってことは静止もできるんだぜ」

その瞬間に俺は空から加嶋に向かって突撃する。

『はああ！』

拳を加嶋に向けて。

「つく」

加嶋は空から襲い掛かる俺を空気を弾き飛ばすことで迎撃する。

「余所見禁物！」

その間に近づいていた健一が殴りかかる。

「解ってないな」

加嶋は周りの空気をすべて弾き飛ばす。

加嶋の近くの方がすべて飛ばされる。

『がぁ！』

健一は地面に倒れこみ転がり。俺はビルに背中からぶつかると。

そして、落ちるときに風が優しく受け止めてくれた。

『サンキュウ』

「厄介だな」

加嶋を見つめて健一は言う。

「まあ、次で終わりか」

突然雨が降り始める。

天気制御が使える健一的能力である。

『ああ』

「雨降ってきやがったか」

ますます不機嫌になる。

加嶋の周りだけ避けるように雨が落ちる。

『常に能力使い続けるしかないよな？その一滴一滴が俺の武器だからな』

そう、雨は俺の武器である。

それを降らせるために健一を呼んだともいえる。

(よく、協力してくれたな…)

「さて、決着の時って奴か」

『ああ』

俺が前にでて加嶋に突っ込む。加嶋は空気を弾き飛ばすが周りの水滴を弾くために力を使っているために威力はたいしたことない。

さらに、後ろから突風が来る。

「つく」

加嶋が回りの水滴を弾くのをやめた。

同時に俺は空気にはさまれる形になる。

『がああ！』

それでも前に進む。

「行けええ！」

後ろの風がさらに威力を増す。

(く、苦しい…)

空気の中に挟まれている俺としては相当苦しい。

加嶋の近くまで来たところで殴りかかる。

「あめえ！」

加嶋は軽く地面を蹴ると空を飛んだ。

俺は後ろからの風の勢いに負けて倒れる。

「空気を自分の方に向けられることで飛ぶことができるのかよ」

健一が説明を簡単にする。

『だが、終わりだ…』

体中が痛むが力は使える。

加嶋の服や体についた水滴を操り地面に向かって落下させる。

「っち」

それでも空中に留まり続ける。

「終わりだ！」

健一が加嶋同様に風を使って空を飛び、加嶋を殴りつける。

「あああ！」

地面に落下する加嶋を水を集めて受け止める。

『終わったか…』

「厄介なものだな、能力ってやつは」

健一が静かに地面に降り立つ。

俺は立ち上がろうとしたが体中が痛んで立てなかった。

「休んでろ。後は俺がやっておく」

健一の言葉を聞き。俺は座り込む。

『まかしたよ』

加嶋を担いで行く健一。

俺はその場で少し休む。

(佐藤。これで終わったぞ…)

疲れが取れていくとゆっくりと立ち上がり家に戻った。

道のり（後書き）

戦闘シーンに矛盾があるんじゃないかと書き終わってから不安です。

レベル0

次の日

いつものように目的も無く町を歩いていた。

『ブラスター』は加嶋が殺人の罪で捕まり自動解散となり俺にとっては清々しい日だ。

だが、気になることが無いわけではない。

(御坂のクローンと一方通行アクセラレータか…)

今回ばかりは対策が思いつかない。

(実験といわれていたが絶対能力者になることが可能なのか?)

確かにその場所に一番近いのは学園都市第一位である奴に間違いない。

(神の領域に入るためのことがあんな実験だというのだろうか…)

考えながら歩いていると御坂らしき後姿を発見した

「よお。御坂」

声をかければ

「あなたは誰ですか」とミサカは率直に問います」

別人だった…。

振り返った彼女の姿はいつもと違って額にゴーグルをしている。

「すみません。間違えました」

そう言っただけで離れようとした。

相手は何事もなかったように歩き始めた。

(思えばチャンスか…。後を追えば一方通行アクセラレータがある…)

少し考えた結果追おうとしたが…。

すでにその場にはいなかった。

当たりを走り回ったが見つからなかった。

「ちくしょう!」

(何を考えていたんだよまったく…)

「翠か?」

後ろを振り返れば見覚えがありすぎるツンツン頭の不幸少年。

「当麻か」

その時になって気づいた。

(幻想殺しなら一方通行にも勝てるんじゃないか…。それに、最強の前提で動いている計画がレベル0にやられることで破綻するのではないか)

「どうした？ 難しい顔して」

何も考えずのんきな声をかけてくる。

「ああ。いや、なんでもない」

助けを求めればこいつなら助けくれただろう…。だが、たった一度右手以外が触れれば殺される。そんな場所に連れて行きたくなかった。さらに言えば一方通行に幻想殺しが通用するかも不明なのである。

「困ったことがあれば言えよ。協力してやるからな」

まるでこちらの考えを知っているような言葉に言い出そうとしたがその言葉を飲み込み。

「お前もな何かあれば言えよ。最弱なんだからな。俺にも頼れよ」

そう言って別れた。

この判断は正しいと自分に言い聞かせた。

(適当に歩いてるとよく当麻と会うな…)

そんな疑問を思いながら都市の中の一を探す。

すべてを終わらせるために……。

最強

歩き続けた結果。

無駄足となった。

隠れて行われている実験を簡単に見つけれるなんて思っていないが
一方通行アクセラレーターくらいなら見つかると思

っていた。

(考えが甘すぎるか…)

歩いていると御坂の事が気になった。

(あいつは弱くないけど…。目の前で自分のクローンが殺されたんだからな…)

考えていればすぐに家に着く。

「はっはアッ！」

後ろから奴の笑い声が聞こえる。

「逃げる逃げる」

後ろからの鬱陶しい声を聞きながら走る。

「追いつかれたからにはゲームオーバーだぜエ」

目の前に急に現れる学園都市最強。

「終わりだア」

奴の手がゆっくりに俺の顔を…

『うああああ！』

ベットから一気に起き上がる。

そして、周りの状況を確認する。

(悪夢か…。それとも、正夢か…)

喉が渴いたから水を作り出しそれを飲む。

『はあはあ……』

最悪な目覚めである。

だが、俺は止めてやる。あの夢が実際に起こることはない。なぜなら…。

(あいつは戦ってるのに俺が逃げるなんて事はない)

何時から俺は熱血野郎になったのか解らないが今日も歩き始める。

まるで、運命のようだった…。

路地裏から出てくる一方通行を見つけた。

『探したぜ。一方通行』

「ああ？」

こちらを向いた一方通行。

『ここで負けてもらっつ』

周りに水滴を浮かせて言う。

「なんで、いつそがしい時によオ。こんな雑魚どもが来るのかなア
！」

一方通行はいつものように弾丸のように真っ直ぐ飛ぶ。

目には見えていた。

避けることもできた。

（次は俺の番だ）

なんて考えていると

「はア？もう、安心してんのかよ雑魚オ！」

奴は目の前に入った。

考えの甘さを実感する瞬間だった。

すべての力の方向を変えられるということは…。

足が地面につけば、そこから360°。どこにだって最高速度で動ける。

（ばかげてるだろ…。最高速度の相手を体に触れられずに倒せつてよ…）

「とりあえずよオ。スクラップ決定だ！」

相手の腕が来ると思った。

「そろそろ時間ですつと、ミサカは実験時間が近づいていることを報告します」

声のする方向にはクローンがいた。

「はッ！」

一発殴られた。

力操作をされているのか普通の拳で俺の体は吹っ飛び建物に当たり止る。

『がっ！』

「命拾いしたなア」

本当にその通りである。

俺は恐れてしまい。その場を離れた。

(くそ…。なんで、こんなに弱いんだよ！ちくしょう！)

その時、流した涙は痛みからではなく自分の弱さを実感したからの物である。

そして、少しして路地裏に向った。

「がッ」

吐きそうなそんな音だ。

(殺されてしまったのか…)

そう理解した。自分は弱いのだ。ただ、臆病で何もできない。

俺の目の前には一最弱(最強)がいた。

『当麻、お前も都市の闇に触れてしまったのか』

「翠…」

睨むかのような目はすべてを語っていた。

お前がやったのかと。

『当麻、確かに俺はこのことを知っていたが…。俺じゃない』

「なんだよ！御坂妹だぞ！どう見たってこれは殺されたんだぞ！」

感情的に言葉を口にする当麻。

『もうすぐ、来る。そいつらの到着の後でも説明は遅くないだろ』

「何が来るって言うんだよ！こんなところに」

最もな言葉だが…。奴らは来た。

「申し訳ありません」

来たのだ奴らが…。

最強（後書き）

一方通行戦はどうやって翠を生き残らせるか悩みました。

学園都市

『当麻、これが学園都市の奥底だ』

「!？」

当麻は驚いて何もいえない。

「作業を終えれば戻る予定だったのですがっと」

「お前ら誰なんだ!？」

それが当麻がひねり出した言葉である。

「ここにいるミサカは全てミサカです」

「死亡したミサカも同じくミサカです」

「黒猫は大丈夫でしたか？」

周りから御坂妹（ややこしいので当麻の言い方を採用）が現れていく。

「量産軍用モデルとして作られたクローン。シスターズ妹達ですよ」

説明をしつつ後処理を始めていく。

『シスターズ妹達か…』

「本実験にあなたを巻き込んでしまったことを重ねて謝罪しましょう」と、ミサカは頭を下げます

最後にそついい残して御坂妹は退散していく。

「ま、待て……」

当麻が引き止めると全員がこちらに振り向いた。

そして、何も言えずにいて、何も言わない当麻を御坂妹は見捨てて退散した。

「何なんだよちくしょう！」

地面を殴りつける当麻。

『あいつらは学園都市のレベル5をレベル6にレベルアップさせるためにいるってよ』

俺が冷静に伝える。

「……」

『科学者からすればボタン一つで作り出せる量産ぶ……が！』

当麻に殴られる。

「あ……。すまねえ……」

地面に手をついて立ち上がりながら続ける。

『当麻。理解しろ。人間一人一人見方が違う。科学者からしたらあ

いつらは無限に作れる物なんだよ』

「翠！お前はそれが正しいって言うのかよ！」
デメエ

壁をたたいて怒鳴る当麻を…

俺は殴った。

『誰がそんなこと言った！俺も止めたいと思っているに決まっ
てるだろ！』

今度は当麻が倒れる。

『相手の能力は最強だ。相手は触れただけで殺すことができる。機
動力は常に最高速度。俺じゃ倒せないんだよ！』

当麻が立ち上がる。

「なら…。お前が無理でも俺が倒せてやる！」

何時に無く鋭い視線。

『それで良い。だが、たった一度触れられたら死ぬぞ。その右手以
外がな』

俺は右手を当麻に出す。

「人を殺して強くなるなんて言うなら…。まずはその幻想をぶち殺
す！」

最強の無能力者は俺の手をつかみ握手する。

学園都市（後書き）

当麻の最後の台詞は決意の意味を持たせましたがどうだろうか…。
殴りながら言う台詞を握手しながら言うって…。
感想&readバイスお待ちしています

悪党

『さて、どうするっ？』

俺は当麻に聞いてみた。

「アクセラレーター一方通行がどこにいるかだな」

当麻が戦うとすればそれが問題である。

見つかっていない相手を倒すなんて不可能である。

『居場所を探るしかないか…』

今日、偶然見つけれたというのに再び探すことになるなんて…。

「御坂には解らないのか？」

『お前、理解していないようだが御坂は協力してるわけじゃないんだからな』

当麻の頭についていくのも大変である。

「違う違う。あいつなら電子系にハッキングしてわかってそうだって言ってるんだよ」

おっと、当麻の方が頭が良かったなんて絶望するぞ…。

『解った。手分けして二人を探そう』

「解った」

そして、お互いに別行動となった。

俺は適当に都市を歩く。

(見つらからないんですよ…。学園都市広いしな…)

そして、夜になるまで探した。

今日は引き上げかなっと思ったら当麻から電話が来た。

>見つけたぞ！<

『本当か！』

当麻の話によれば御坂の部屋に研究資料があったそうだ。

きっと、ハッキングか何かで手に入れたのだろう。

そして、今日の実験場に俺たちは向かう。

『お、当麻』

橋で当麻と合流した。

「思えば、お前来なくても良かったんじゃない？」

確かに、戦うのは当麻で俺がいたら俺のせいで一方通行が負けたと

なつてしまつたら無駄な努力である。

『まあ、そうだな。だけど、役割はあるよつだ』

橋の真ん中あたりで立っている御坂が目に入った。

『ここに入るつて事は今日はこっちの方向であたりなんだな』

「この件には関わらないでつて、書いていたの見なかつたの？」

橋の手すりにもたれながら言う。

『ああ、書いてたかな』

「だったら、帰りなさいよ！関係ないでしょ！」

「関係ないなんてこと無いだろ！」

隣で当麻が怒鳴る。

『ん？帰るだけだが？』

当麻を無視して言う。

『俺の居場所である地獄に帰るんだよ』

俺は一方通行に喧嘩を売つた時点で死んでいると見て良い。

「ふざけたことはやめなさい。大体、どうやって知つたのよ」

当麻は静かに報告書を取り出し御坂に見せた。

「へー。その報告書を持つてるって事はアンタ達、私の部屋に入り込んだのね」

『待て、それに関しては俺は無関係だ』

状況が状況だがすごいことするなこいつは。

「さて、あんた達の方でも調べたようだけど。どうするのよ？一方通行にでも挑む気？」

「ああ。そのつもりだ」

『俺は無理だったがこいつならやれるっと思ってる』

真剣な目で御坂を見つめる。そして、気づいた。

『待てよ…。何故だ…。何故ここにいる！』

おかしな話である。

御坂では一方通行に勝てなかった。それは前の戦いで解っている事だ。

相手はレールガンですら通用しない絶対な力である。

だったら、何故御坂はここにいる。

「これしかないの」

御坂も真剣な表情で言い返してきた。

その表情から解ることがある。

御坂は死ぬ気なのだ。

確かに、一方通行が御坂を殺そうとした時に妹達シスターズは言っていた。

> 計画外の戦闘は予想演算に誤差を生じるおそれがあります。とミサカは警告します<

つまり、計算に誤差を入れてこの計画を止めさせる気である。

『当麻！行くぞ！』

俺はそういつて走り出した。

その後を当麻が続くが。

俺の足元に電撃が飛ばされる。

「最後の警告よ。帰りなさい」

『お前、死ぬ気だろ。死んだって、この計画は樹形図ツリーダイアグラムの計画者によってできているなら再計算されるだけだ。ただ、時間を引き延ばしているだけじゃないか！』

これだけ大掛かりなものが樹形図の計画者を使わずとは思えない。だから、誤差があってもすぐに立て直せるはずだ。

「それはないわ。樹形図の計画者は二週間前に地上からの原因不明の攻撃で撃墜されてるの」

(そんなバカな…)

地上から宇宙衛星を撃墜など不可能に近い。この学園都市から本気で攻撃してもやれるかどうかかわらないっと言うのに。

「さあ、解つたなら…」

『今だ』

俺の合図で当麻と一緒に御坂の横を通る。

『さて、当麻行け』

俺が言うまでも無く当麻はそのまま走りすぎようとしていた。

「帰れって言うてんのよ！」

雷撃の槍が当麻に向かって飛ばされる。

俺は左手で受け止めた。

体中に電撃が走り一方通行に殴られたところが痛む。

それでも立ち続けた。

「翠…」

『何してやがる。さっさと行け!』

心配そうに足を止めた友に怒鳴りつける。

「すまない」

そういつて当麻は走りだす。

「何やってんのよ」

『戦う意味が無いんだよ』

正直言つて今ので左手は役立たずになった。

左肩あたりから痺れていて言うことを聞かない。

「私が行けば1万人の妹達が殺されずにすむのよ!」

『もう、俺の目の前でたった一人も殺されたくない!お前も妹達も
』!』

「そんな、都合の良い答えがあるはずない!」

再び電撃が放たれる。

俺はその場から動かない。電撃は俺に当たりはしなかった。

「なんで、いつもみたいに水を出して守らないのよ」

前髪をパリパリならして聞いてくる。

『何度も言わせるな。戦う意味が無いんだよ』

「真面目に戦わないと…。死ぬわよ」

電撃が俺のすぐ横を通り過ぎた。

『やる前からあきらめてんじゃない!』

「あんたに何がわかるのよ!」

頭上から電撃が襲ってくる。今度は俺に当たり体中に電撃が走る。

『この程度じゃ、俺の命は消えないぞ…』

かっこいいことを言っているが限界が近い。

『大体、方法はまだまだあるんだよ。お前が死ねば解決なんて、逃げていただけだろ!』

「うるさい!!」

電撃が俺に直撃。

ふらふらしながらも倒れはせず。その場にしっかりと立ち止まる。

「私のせいで一万人の人間が死んだ!私が殺したのよ!」

怒りを俺にぶつけながら続ける。

「そんな…悪党が生き延びて良い訳ないんだから…」

『悪党か…。ちっぽけな悪党だなおい…』

その場に立っているのがやっとの状態で言葉を続ける。

『たった一人の無抵抗の人間を殺せない奴が悪党を名乗るな！』

「うるさい！うるさい！」

御坂の周りで電撃がバチバチ鳴らしている。

『気付け！こんな方法で誰も救えないことを！』

『お前が死んで一万の命が救われてあいつ等が嬉しいとでも思っているのか！お前が救いたいっと思っ者は、そんなくだらない存在だっ
て言っのか！』

「やめてよ！」

周りの電撃が御坂に集まる。

「そこをどきなさい！でないと、今度こそ…」

『お前が本当の悪党だと言っなら。殺してみろよ』

次の瞬間。

俺の目の前に真っ白な世界が映り、爆音が鳴った。

クローン

気がついたら御坂が俺の頭を抱えてくれていた。

しかし、こちらを見下ろすみたいで怖いんですけど…。

「アンタ…。馬鹿じゃないの!？」

気がついてすぐだというのに怒られるなんてな。

『馬鹿だから仕方ないだろ…』

「確実に一回…うん五回は死んでたわよ? たまたま、私の狙いが甘かったから無事だったけどさ」

『違うよ。お前は甘くない。お前はそれで良いんだよ。それを信じて俺は何もしなかった』

「ほんとバカ」

寂しそうな声で言う。

「能力使えばよかったじゃない。軽く黙らせたでしょ。本気で死んでたかもしれないのにそんな事いえるのよ!？」

学園都市の中で3番目に強いと言われる御坂美琴が涙を流していた。

3位だの何だの言われたって、中学生なのだと改めて思い知らさ

れる。

(大変だろうな…。まだまだ、子供なのにこんな事ばかり押し付けられて)

『御坂…。泣きたければ泣けばいいし、困れば助けを借りれば良い。何でもかんでも一人で背負い込んでいたら駄目なんだよ』

>ゴパ<

突然爆発をしたかのような巨大な炎が発生した。

「な、なに!?!」

(当麻…。何とか勝ってくれ…)

『当麻だ。一方通行と戦ってるんだ。この計画は無能力者が一方通行を倒すことで終わらせる』

「そんなの無茶よ!」

『それができる。あいつは無能力者だが…。最強だ』

それでも心配そうに御坂は燃えている方を見る。

『俺は良いから、当麻の勇士を見て来い。俺も後から行くから』

「ええ…。そうするわ」

俺を橋の手すりにもたれさせて御坂は燃え盛る方へと行く。

(さて…。役割は終わった…。ゆっくり、休もう…)

目を閉ざそうとした時…。人の気配を感じた。

気配のするほうを見れば…。

『嘘だろ…』

俺がいた…。

まるで鏡に映った自分を見るような感じだ。

『双子も兄弟もない…。クローンって事か…』

冷静に考えをまとめて行く。

普通なら驚いて何も考えれないが御坂妹でクローンのことは知っているし、俺のクローンが作られる可能性があるのも解っていた。

俺が記憶のないときに部屋に侵入して血を採られ、御坂のクローンを見たときには覚悟をしていた。

「面白くない反応だ」

暗闇の中から現れる白衣を来た人間。

「もつとき、誰だお前とか思わないの？」

『お前誰だよ』

「ああ、私は『やっぱり、いいや』」

名乗る瞬間に邪魔をする高等テク。

『さて、さつきから何もしゃべってない俺のクローンだが……。どういうことだ？御坂のクローンのようにしゃべれないのか？』

「ああ、あの計画にかかわってるのか。このクローンたちとあのクローンはちがうんだよ」

白衣が楽しそうに語りだす。

『何が？』

「感情をなくしたのさ。殺人兵器に必要ないだろ？」

『は？』

俺のクローンが殺人兵器？

「君の能力は素晴らしいよ。遠隔で一方通行のように血流を逆流できるとだからな」

『……』

確かに、俺は対人では最強である。だが、殺すことになるからやることは無い。

「そして、君のクローンには君と同じ能力が使える。つまり、能力

の範囲なら確実に相手を殺せる」

『ああ…。そういうことか、解った解った』

俺は適当に流した。

『さて、半殺しかな』

体中が痛むが無視して立ち上がり怒りの矛先を白衣に向ける。

「ふん。やれ」

クローンが動き出す。一人かと思っていたクローンの後ろに八人くらいクローンがいた。

「全員でお前を潰してやる」

『はあ…。嫌なことが多いな最近…』

悪党

クローンたちは俺にむかって、走り出す。

俺は一步も動かない。

なぜなら、勝負はすでに決まっていた。

次の瞬間にはクローンたちは体から血を噴出していた。

>ぶしゃー！<

血が噴水のように飛び出す。

すぐに周りは血の色に染まった。

「ひ、ヒイ！」

腰を抜かして、地面に手をつける。

『解ってないな……。確かに、能力範囲に入れば一撃だが、相手の範囲より俺の範囲の方が広ければ問題なんて無いんだよ』

悪意に満ちた顔で言ってる。

わざと足音を響かせる。

『ちなみに、俺の範囲は半径100mくらいらしいな』

「な…。そんな、ためらい無く殺すだと…」

(ためらい無くね…。言うなら簡単さ…)

俺は地面を蹴り白衣の前まで行く。

『感情が無いって、言ってくれてよかったよ。感情あると躊躇うからな』

白衣は逃げようとするが

「があああ!?!」

俺が片足に水を勢い良くぶつけると白衣は倒れた。

『まだ、解ってないな。半径100mは俺の攻撃範囲で逃げられないんだよ』

「た、助けて…」

白衣は見つとも無く泣いている。

『じゃ、教える。俺のクローンの研究所の位置とクローンの数。目的、全部だ』

「う…」

白衣が一瞬躊躇ったのを見ると

白衣の片足を思いつき踏みつけた。

「ああああ!!」

『俺は覚悟できてるんだよ。悪党になる覚悟がな。お前一人くらいなら殺して誰だかわからないくらいぐちゃぐちゃにするのなんてよ。10秒あれば十分過ぎるんだぜ?』

「わ、解った。話す話すから。命だけは頼む」

その後、話を聞いたところによると。

クローンの数は今俺が殺したので全部で俺を殺すことがテストだったらしい。

研究所だが電撃を扱う能力者の襲撃によって全滅で資料もなくなっている。

目的としては単純な殺人兵器としての利用らしい。

『なるほど、潰す手間が省けたわけか…』

「はい、そうです」

(こうなると俺は次の行動をしなくても良いか…。多分襲撃者は御坂だな…)

「私はもう良いでしょうか?」

『ああ、良いだろう。警察に自首しろ。出なければ殺す』

「はい！」

白衣は足を震わせて一度、躓きながら振り返らずに走り去った。

静寂が訪れ、俺はクローンの一体の下に行く。

血まみれで倒れている俺。

(俺の力は一撃で相手を殺す…。俺自体が生物兵器ってか…)

俺の遺体の目をつぶらせて行く。

そして、最後に彼らに向かって手を合わせる。

「すまなかった…。でも、殺人兵器となるお前らを救いたかった…。俺にはそれができないんだ…。許してくれっとまでは言わないから安らかに眠ってくれ…」

そして、彼らの遺体をそのままに俺は当麻たちの方へと向かった。

当麻を見つけたときはボロボロであたりは悲惨なことになっている。

(当麻…。すごいよ…。本当に勝つなんてな…)

『勝ったようだな…』

当麻の頭を抱える御坂に聞いた。

「ええ…。勝ったわ…。一無能力者(レベル0)が学園都市最強を倒したわ…」

上条当麻は相手に触れられる事も無く、学園都市最強に勝ったのだ。

『さて、馬鹿を病院に連れて行かないとな…』

俺が当麻の体を抱える。

「アンタもボロボロじゃない」

『まだまだ、大丈夫さ』

そう言っつて当麻を運び出す。

当麻は力をすべて出し切ったのかスヤスヤと眠っている。

(お前のクローンは絶対に作られないだろな…)

幸せな顔をしている当麻を羨ましく思った。

「あれ…。アンタ、血がついてるわよ」

御坂が俺の肩についている血に気がついた。

『ああ、ちよつとな』

俺は適当に言っつて、会話を終わらせた。

そして、あの橋に来た。

橋の上には遺体が8体。

そして、血の海ができています。

「え……。何よこれ……」

御坂がその場の状況に驚いている。

「アンタ……。なにがあったのよ……」

御坂は俺がここにいたことを知っている。

病院に近い道は橋を渡るしかなかった。

『悪いが当麻の方が先だ』

そうやって、後回しにするしかなかった。

そして、気まずい雰囲気のまま、病院に当麻を運び込んだ。

当麻を診察してもらい病室でスヤスヤと眠っている当麻を確認して病院の外に出た。

『待たせたな』

すでに外にでて俺を待っている御坂に言う。

「あいつは？」

あいつとは当麻のことだろう。

『大丈夫、診察してもらって今は病室で眠ってる』

「そう…」

『たいしたこと無いってさ。休めば元気になる』

「本当に倒しちゃうなんてね」

誰もが驚いた事実である。学園都市の最強が最弱に負けたという事実…。

実際に見ていた御坂でも信じられていない。

『そうだな、あいつはすごいよ』

「それで…。何があったの？あの橋で」

辺りの気温が一気に下がった気がする。

『どうしても聞くのか？』

つい、そんなことを聞いてしまった。

「ええ」

御坂に迷いは無かった。

『あの橋でな…。お前が行ってすぐに俺のクローンを連れた白衣の男が現れた』

「え？」

御坂は口を開けたまま驚いた。

「まさか、あの血…」

誰もが簡単に思いつくその答え。

『ああ、俺がやったよ』

暗い声で言ってしまったな。

自分が悪党で良いって思ってたのにな…。

「アンタ…、何でそこまでの…」

暗い声に反応して聞いてくる。

『俺だって…殺したくなかった…』

自分の声かも解らない弱弱しい声だった。

「え…？」

『俺のクローン達は…。殺人兵器として作られた…。俺が止めな
きゃ…。大量の人を殺していた…。だから、殺して止めるしかなか
つたんだ…』

「…」

見つとも無く、涙する。

『なあ、御坂……。教えてくれ……。俺の判断は正しかったのか？』

「え……」

いきなりの質問に驚く。

『解らないよな……。こんな事急に聞いたって……』

そういつて俺は病院を離れていった。

待ちなさいなど聞こえたが俺はそのまま帰った。

悪党（後書き）

はい、クローン瞬殺！

主人公の能力の本当の力を出しましたね。

そして、自分のやったことに後悔…。

能力範囲が適当なんですけど広すぎたかな？他の能力者の範囲とか知らないから…。

さあ、一方通行も終了し、そろそろ終了かな？

最終回じゃないよ

(あー、嫌われただろうな…)

帰ってベットの上で横になりながら御坂のことを考える。

その後にはあの時の選択が正しいのかと考えてしまう。

俺のクローン…。いや、俺という兵器にしたこと…。

一瞬だった。俺が力を使えば…。

周りにいた兵器たちが死ぬのは…。

シスターズ
妹達が良く思えてしまうな…。

命令に忠実だったようだが、感情があり、思いを伝えるための声もあつた…。

俺のクローンたちに無かつた物があつたんだ…。

『はあ…。何で俺にこんな力があるんだろうな…』

目の前に水を作り出して、それを空中に留める。

『こんな力が無ければ…。俺は…！』

力のことを考えているとむしゃくしゃしてきた。

『寝よう…』

気持ちを抑えて、眠りについた。

目が覚めれば昼だった。

(良く眠ったワリには頭がぼんやりするな…)

俺は昼飯を食べ。外に出ようと思ったが…。

(今日は良いか…。特に用事も無いしな)

家にこもることにした。

小説を取り。読み始める。

そして、必要最低限しか外にでない生活が始まった。

数日後。

俺の携帯に一通のメールが届いた。

『誰だ…?』

当麻からだった。

「件名：お前

御坂から聞いたがお前はどっ思ってるんだ？」

(余計な事を…)

そう思っている反面では、ほっとしている。

心配してくれてたっ…。

メールで「間違ってたのかな」と送る。

返信はすぐに帰ってきたが…。

「間違っているに決まっている。

お前がやったことは間違ってる」

(…当麻、お前…)

はっきりと言えろっと言うところどころでこいつはすごい奴だと思っ
てしまっ。

俺は当麻に電話をかける。

『はっきり言ってくれるな』

つながった瞬間に言う。

>はっきりと言わないと解らないだろ<

『ああ、その通りだな。解らないだろうな…』

>それで、どうすんだ？<

『どうしようか…。って言っても、殺人って重みを背負っていくし
かないんだろっな…。』

>…<

『さて、悪いって言ってもらえれば楽になったよ。ありがとう』

>自分を追い詰めるなよ<

『まあ、大丈夫だよ。いつもどおりになるよ。心配かけた』

そう言っつて、電話を切った。

(悩んでる俺が馬鹿に思えるな…。罪は消えないが…。これまで通
りに入ることを決める)

そっついや、どうでも良いことだが…。

当麻が海に行つて、帰ってきたら入院生活をしたらしい。

最終回じゃないよ（後書き）

なんか…。重かった話がいきなり軽くなってますね…。
前回、御坂に言った言葉がすごく軽いぜ…。

まあ、その辺は自分の力不足なんで見逃してください。
一方通行で終わろうと思っていたんですが…。気まぐれの予定変更。
夏休みは終わらせようと思います。
もう少しの間、お付き合いしてくださいさると嬉しいですよ。

最終回でも良いかも知れない…

ある日、俺は御坂に出会った…。

しかも、二人つきりである…。

(なぜ、こうなった…)

10分ほど前の話である。

あても無く、ぶらりぶらぶらと学園都市を歩いていれば、御坂、初春、佐天の3人組に見つかった。

御坂は気まずくて話しかけたくなかったそうだが、2人が話しかけてきて、急に用事ができたとか完全に嘘を言って俺と御坂を二人つきりにしたのである。

あの日から話をしたことを無かったので気まずい。

『なあ、御坂』

「な、なによ」

軽くにらみつけられる。

『あの日の事はすべて真実だ。俺は俺を殺した。殺す以外に方法があったのかもしれない…。だが、俺は俺を殺したこの罪を俺は背負って生きて行くしかないんだと思う』

これが俺の出した答えだ。

「な……」

御坂も急なことに驚いている。

『クローンを救ったお前のようになりたかったよ。俺は殺すことしかできなかつた弱虫だよ』

「違う。私じゃ、あの子達を救えなかつた。アンタ達がいなかつたら私は何一つ救えなかつた……」

必死な表情で俺のことを真っ直ぐ見つめて御坂が言う。

『違うぜ。俺はあいつらを救いたいっつと言うお前に手助けしただけだ。俺や当麻もお前のその行動が無かつたら何もできなかった。だから、お前が救ったんだよ』

「ねえ、アンタは、何でクローンを作られたのよ？」

やっぱり、聞いてくるかっつと自分の中で嫌な気分になる。

『俺が生物兵器だからだよ』

「え……」

『俺の能力は水を操ること。なら、人の体内の血液を操ることができる。知ってるだろ？』

俺は御坂の前で血液を操った。

『簡単なことだ。俺がその気になれば俺の能力範囲内なら遠距離からでも一撃で人を殺す。いや、人に限らず体内に血液を通す生物なら何でもな』

「そ、そんなこと」

『ああ、しないっがなできない事は無い。だから、命令を聞く操り人形を作ればどうだ？人を殺し放題なんだよ。そのために作ったって研究員は言っただよ』

「そんなこと…」

どんどん暗くなっていく。

『俺の持った力は禁じられた物なんだよ。それでも俺は罪を背負って生きていくしかないんだ』

笑うことができないが無理やりでも笑顔を作った。

御坂から見てどう見えたのかは解らないが笑顔を作れたと思う。

「アンタ…」

『正しいなんて思わないよ。いや、間違ってるよ』

御坂の言葉を遮って俺は言った。

『じゃ、俺が怖いなら無理して話しかけなくても良いよ』

そういつて俺は御坂と別れようとした。

「そんなこと無い!」

歩き出した時。御坂に止められた。

「アンタが怖いなんてこと無い。アンタは私を助けてくれた!」

『助けたのは当麻だよ』

俺は振り向きはしない。

「それでも、アンタも助けてくれた!だから、怖くない!」

『はあ…。俺が逆なら、怖がるんだがな…。』

御坂のほうを向けば鋭い視線が俺のほうに向いていた。

『俺は罪を背負ってるがいつもどおりにするだけだ。死んだりもしないし、暇だったら声でもかけてくれよ』

俺はいつものような表情でいつもの口調で言う。

「あ、うん」

御坂も普通に返事をする。

『後、アンタアンタ言つな。俺には流雅 翠っていう名前があるんだよ』

つい最近だが、かなり昔のことに思える記憶の中で御坂が言ったように言い返し俺は離れていった。

いつもの俺に戻っていった。学園生活に退屈していた俺でなく…。

いろんな奴に会って楽しんだ俺に…。

最終回でも良いかも知れない…（後書き）

書いていて、最後のほうに思った。

あれ、これ最終回じゃね？

まあ、最終回でも良いかもしれないって事で最終回じゃないんですけどね。

次回で夏休みの最終日。

最終日が終わればこの作品も終了！

これまでありがとうございました！（早いかな…

夏休み最終日

不幸とは感染症の一種だと思う。

この病伝体は本体（当麻）を叩かないと無くならないと思う。

俺は一人、当ても無く歩いていた。

そこで御坂が現れた。

「ごめん。待った」

笑顔で俺の横を通って行った。

俺の後ろには誰もいないのに…。

後ろを少し見ながら前に歩く。

「まったー！？って言ってんでしょが無視すんなやこらー！」

『へぶち！』

後ろから、御坂の突進を受けて変な言葉をだす。

思いつきり顔面から地面にぶつかる。

結構痛いよ。

『な、なんだよ…』

振り返れば頬を赤くした御坂の顔が。

「お願い話をあわせて」

『は？』

「あっはっはー。ごめーん。遅れちゃって」

御坂の口調が変わります。

「おわびに何かおごったげるからそれで許してね」

やさしい御坂さんが怖いです…。

「てな訳で私こいつと約束してたりしてごめんね。海原さん」

言い終わった瞬間、俺の手をとった御坂は猛ダッシュでその場を後にする。

『どこに連れて行く気だ！？』

俺の言葉に反応してやっと止まる。

「そつよ…。良いこと思いついたわ…」

絶対に嫌なことだな…！

『まったく、解らないんだが帰って良いか？体調悪くなったんだが

…』

撤退を図ってみたが…。

「アンタと私がここ、こっ恋人に」

こいつ…。御坂か？

俺は疑問を持ち始めた。こいつは偽者じゃないか？

俺を討つ刺客じゃないのか…。

『馬鹿だな、御坂。まるで俺とお前が付き合うみたいじゃないか』

バチバチ！

御坂の前髪が電撃を放つ準備をし始めた。

どうやら本物のようだ。

「なりきりるだけよ！なりきるだけ！」

顔を真っ赤にして反応する。

『まあ、当たり前だな』

なんか知らないが、御坂にため息をつかれた。

『それで？どうするんだ？』

「え？」

『恋人の振りをするんだろ?』

その後、俺は御坂に食べ物をおごって貰ったり。会話をしたりした。平和な時間だった。こいつと付き合つとこんな時間が過ごせるのだろっかつと思つた。

そう、つかの間の平和だと俺は知らずにいた。

御坂がジュースを買いに行くとき俺から離れたときに朝に御坂と一緒にいた。確か、海原と呼ばれる少年とであつた…。

「こんにちは」

夏休み最終日（後書き）

後1〜2話で終了になると思います。

これまで読んでいただけた皆さんに感謝！

海原

『こんにちわん』

少々ボケてみたが向こうは無反応だった。

「自分は海原光貴、と言います。あなたは？」
ボケたのに無視されたよ…。

『俺は流雅翠だ』

愛想無く答えてやった。

「気を悪くしなければ教えて頂きたいのですが、あなたは御坂さんのお友達なんですか？」

やはり、その質問かつと心の中でつぶやきつつ。

『気になるものなのか？』

「ええ」

即答だった。

「自分の好きな人の側にいる男性となれば当然」
清清しい顔でそう答えた。

「御坂さんは、もっと人に対して好きと嫌いをはっきり言うべきだと思います」

『はつきり言っつて相手を傷つけないんだろ？多分な』

「だから、自分みたいな人間がずるすると追いかける羽目になります。こちらは本気でアタックしてるんです。本気で答えて欲しいものです」

奴の表情が曇り始めた。

「たとえ拒絶であつたとしても」

表情に明るさが無くなった。

『断られた、自殺するタイプだろお前』

俺は思ったことをはつきり言つ。

「それは分かりません。冷静なら好意を持って貰えるように努力するでしょうが…。彼女の口からそれを告げられたら…。この心がどうなってしまうのか…」

何やっつてんだらうな…。御坂が好きだつて言つ奴の話聞いて…。

「でも、御坂さんが…。彼女が幸せでいなければ何の意味もありません」

今まで暗かつた表情が一気に明るくなった。

こいつ…。自分の想いの人の事をここまで…。

自分には無い感情を聞き驚いてしまう。

ガシャン

御坂が帰ってきて、勢いよくジュースを入れたコップを机に叩きつける。

いやいや…。紙でできたコップなのに何故壊れなかった…。

コップが壊れてジュースがこぼれることを心配した俺はそっこのほうに驚いた。

「話があるの、こっち来て」

軽く睨まれた。

『お呼びだぞ』

怖かった俺は隣の海原に押し付けようとしたが…。

「アンタよアンタ！」

無理やり引きずられて行く。

「海原と仲良くなって意味ないでしょーが！」

そして、人通りの無い所で中学生に叱られる高校生。知り合いが通らないことを強く祈る。

「アンタは今、私の恋人役なの！海原をあきらめさせるためのものなの！この基本だけは忘れないでよね」

相手があんなにも行ってたのに当の本人がこれって酷くないか…。

『駄目だ』

「え？」

『あいつはお前の言葉を待ってる。お前の口から、お前の気持ちを伝えてもらうのを待ってるんだ。こんな事したって無駄だ。それに、あいつの気持ちを聞いたらこんな事、駄目だって思っちゃまった』

「そう、よね」

相手につらい言葉を言うのがつらいのか御坂の表情はつらそうだった。

『あいつ、良い奴だから…。根に持ったりしないから安心しろよ』

そんなことを言ったら、御坂は俯いて、何かを呟いた。聞き取れはしなかった。

顔を上げれば明るい表情だった。

「じゃ！『恋人ごっこ』はここでおしまい！」

表情が明るい…。言葉はつらそうだった。

「悪かったわね巻き込んで」

御坂はすぐに俺に背を向けた。

『良いけどさ、どうするつもりだ？』

「アンタが言ったんでしょ？自分で決着をつけるわ」

振り返らずに答えた。

「アンタはどうするの？」

そついわれて。携帯の時計を見る。

時刻は昼ごろで小腹が空いてきた。

『適当に昼飯だな』

じやなつと言って分かれようとする俺の肩を御坂が掴み。

「なら、美琴センサーがおこったげよう！」

つと、人差し指を上げてウィンクした。

『何がセンサーだ。中学生が』

何だかイラつとしたので言ってみたら電撃が飛んできたよ。

まあ、水の盾で防ぎつつ。

「付き合わせたお詫びにおごったげるって言ってんだから、黙っておごられなさい！」

きついお叱りを受けた。

『はい……』

叱る中学生が怖くて返事してしまった高校生がいた。いや、俺だつた……。

奢ってくれるので俺はその場で待機することになった。

そして、御坂はモックに向かって歩く。

御坂はモックの長い列に並んでつぶやく。

「馬鹿だなあ……。私……」

そのつぶやきを聞き取る者はいなかった。

ベンチに座って御坂を待っていた俺に海原が現れた。

『よお。話は終わったよ』

海原がどうせ聞くだらうと予測して俺は話を進めた。

「あれ？御坂さんはどちらに？」

辺りを見渡す海原。

『御坂は、あの人山の中で格闘中。気前良く奢ってくれるってな。ああ、俺これで帰る…』

俺は一瞬目を疑った。モックの中に海原にそっくりな奴が入っていたのを見たからだ。

『お前、双子か兄弟いるのか？』

モックの方を見つつ問う。海原みたいな奴は見えない。店内に入っただか見間違いか…。

「いいえ」

『今そっくりな奴がいたんだが。見間違いか…』

海原は顎に手を当てて何かを考え。

「メタモルフォーゼ肉体変化という、能力者もいますよ。御坂さんは学園都市では有名な…。自分になりすまして、近づこうとする者がいるかもしれない」

確かにそういった能力もある…。

「気になりますね。ちょっと見てきます」

そういつてモックの方に向かう。

『俺も行こう』

俺も同行する。

急ごうと海原の横を通って、モックへと急ぐ。

その時、俺の後ろで何かが光った。

>ゴパツ！<

俺の横にあった清掃ロボが爆破した。

いや、何かでくっつけていた物が無くなったかのように解体された。

後ろを振り返れば。

『お前か…？』
テメエ

海原が先ほどまで持っていなかった黒い石でできたナイフを持っている。

「まったく、うまくいかないものですね」

今までの明るい表情はどこに行ったのやら…。

今の奴には黒いオーラが見えた。

「人をだますって」

「まさか、本物が逃げ出すとはね。監禁など生ぬるい事はしないで殺しておくべきでしたか」

石のナイフを俺のほうに向ける。

俺は突かれるのだと思い、とっさに右に体を傾ける。

音を立てて後ろの車がバラバラなっていく。

『メタモルフォーゼ肉体変化で体を変えて……。バラバラはなんだ？』

「これだから科学は……。自分たちの計りでしか見れない。あなたたちのような科学と違って、魔術があるんですよ」

正直頭だどうかしてると思った。だが、現状が現状だけに反論はできない。

とりあえずまずいと路地に逃げていく。

海原は逃げるわけではなく、ナイフをこちらに向ける。

そうするだけで周りの者がバラバラなっていく。

『どいつもこいつも……。化物が！』

海原に背を向けて走る。

路地を曲がったところで立ち止まる。

色んなものが吹っ飛んでくる。

夢であればどれだけ良かったか……。

逃げ回れば袋小路に着いた。

逃げ場が無くなったのだ。

「この距離ならば大丈夫ですよ」

息を切らしながら冷静に物事を整理する。

その時間は1秒にも満たない…。

人間は死に際には頭は働くもんだ。

今、はずさないって言った。すなわち何かを射出しているって事だ。

さらに、相手はナイフをこちらに向けて攻撃をしている。

そして、今ナイフを向けられているがバラバラにならない…。

今とさっきまでの違いを考える…。

俺の中に一つの推論ができた。

考えていた間棒立ちの俺が考えをまとめ終わった時には黒いナイフが目の前に来ていた。

緊急回避する。頬かすられ頬から血の雫が流れる。

俺は痛みを感じる暇も無く。

頬を切ったナイフを左手で掴む。

「この武器を奪うつもりですか」

海原が笑う。

『つつあ！』

海原が持っているのは持ち手もある部分だが、俺がナイフの刃を持っている。奪えるはずなど無い…。

左手はナイフで切れて血だらけになる。

気にせず右足で蹴りを放つが簡単に避けられる。

避けた先にあつた布を海原はナイフで切った。

光と風が同時に入ってくる。

「覚悟してください！」

つとナイフを宙に向かって上げる。

『つつああああ！』

俺の左肩が大量の血を噴出した。

痛みを耐えようとするが膝をつき倒れる。

海原（後書き）

さて、主人公死亡で終わりかな…（マテ

夏の終わり

海原は俺に近づいてくる。

「悪いですが、今度はあなたで御坂さんに近づきましょう」

『お前の目的は…。御坂か…』

俺は声を必死に出す。

「解っていませんね。あなたの友人、上条当麻がどれほど危険な事
をしているか」

『は？』

当麻？無能力の奴を学園都市外から狙う…。

「自分がここに送りこまれたのは1ヶ月前…。入れ替わったのは一
週間前ですよ。最初の目的は上条当麻の監視でした」

監視…。そこまで重要視するほどの存在なのか…？レベル5のメン
バーより…。

「本来、魔術と科学は相容れないはずのもの。彼の右手は魔術師に
とって脅威だ」

話の流れからして、イマジンプレイカー幻想殺しで魔術も無効化できる上に、すでに魔
術と接触しているようだ。

『だが、たった1人のために送られてきたなら何故、当麻を狙わない』

友人として最低な質問だが、疑問だった。

なぜ、御坂と関わったか…。

「彼は、^{インデックス}禁止目録を占有し、イギリス清教の魔術師や御坂さん、あなたと通じている」

イギリス清教つてのはわからないがインデックスも魔術の方なのか？まあ、ただものではないか…。

「この世界のパワーバランスが崩れてしまつかもしれないんですよ！」

魔術と科学のパワーバランスがなくなる…。つまり、争いが起こる。

「自分の属する組織は上条当麻達を放置できない危険な勢力と判断しました」

つまり、上条当麻、御坂、インデックス、俺…。少なくともこの4名を処分するっと言うことか…。

『海原…！御坂に近づいたのはこのためか！』

自分の中で怒りがこみ上げていく。

『御坂の話を聞いていた時、すごい奴だと思っていた。俺と比べ物にならないくらい…。でも、偽者だって事か！』

「…ですか」

つぶやく。

「偽者じゃ駄目なんですか！偽者は御坂さんを守りたいと思つ事も許されないんですか？」

ふざけた話だ…。殺す対象を好きになる馬鹿野郎だなんてな…。

『俺は、許さない！』

海原がナイフを傾ける。

「なら！今度はあなたの偽者になりましょう！」

海原が怒った。

少し、辺りが静かになる。

「なぜです…」

海原が驚きながら言う。

「何をしたんですか…」

海原は俺を見て驚く。

『今更かよ』

俺は肩を抑えていた手をどけて、立ち上がる。

『お前のナイフの意味は理解した。光を反射させることで何かが起こるんだろ?』

『ナイフに薄い膜を作れば良いんじゃないか』

「まさか…」

『ナイフを掴んだのは奪うためじゃない。俺の血をたっぷり付けるためだ。ある程度ついていけば、俺の能力で広げることができる』

海原はすぐにナイフの血をふき取るうとする。

『遅い!』

俺が言った時に海原は突然下に沈んでいく。

「これは!?!」

『倒れていた間に地下水でお前の足元辺りをどろどろにして人間が埋もれるくらいにした。何度かやったことあるから簡単だったよ』

海原の体は下へと沈んでいく。

その間にもナイフの血を拭き取る。

『諦めるよ!いつまで騙すつもりだ!』

ナイフをこちらに向けられ俺は横に飛び転がる。

「彼さえ！おとなしくしてくれれば！誰も傷つけずにすんだのに！御坂さんを騙す事もなかったのに！」

ナイフの力で周りの鉄骨がバラバラになっていく。

『本当に御坂が好きなのか…』

驚いている間に海原と俺の間に鉄骨が落ちてくる。

海原はすでに腹部辺りまで沈んでいて避けることができない。

俺は無意識に海原の方に走り出していた。

何やってんだろうな何もなくても俺の勝ちだ。

でも…。ここでこいつが死ねば俺は後悔する。

助けられなかったと…。

俺の気持ちも知らず。海原は俺に向けて攻撃を放つ。

避ける事もできずにしまったと思っていたが攻撃は発動しなかった。

その間にも海原の近くについていた。

最後の抵抗かナイフで俺の脚を狙う。

俺はナイフを持った手を蹴り自分と海原のいる場所に水の厚い膜を張る。

相手は鉄骨だ。こんなので防げるはずが無いのにな…。

『奇跡だな…』

俺と海原の近くに鉄骨は落ちているものの、俺も海原も無傷である。

俺はナイフが近くに無いことを確認する。

「つく！」

今、俺の足元に海原の顔がある。

すでに、肩の辺りまで埋もれている。首だけが出るくらいで考えていたがまあ良いか。

海原が自由に動かせるのは右腕だけである。

少しじたばたして、動けないと知りあきらめた。

「自分の負けですか…」

『お前らのやり方と言えば引き分けた。どっちも命を落としていない』

横に倒れていた鉄骨に座って言う。

「攻撃は今回限りでは終わりません。あなたや御坂さん、上条当麻

を狙い続ける」

急に負け犬発言だ。

「守ってもらえますか？彼女を」

こんな場面で言うのもなんだが…。当麻は守らなくて良いようだ…。

「いつでもどこでも、まるで都合の良いヒーローのように駆けつけて、彼女を守ると…約束してくれますか？」

『はあ…』

俺は大きなため息をつく。

海原は不思議そうにこちらを見る。

『俺も偽者になるようだな。そんな、都合の良いヒーローの偽者になれるかは知らないがな』

「まったく…。最低な返事だ…」

さて、何か忘れてる気がするがどうでも良いか…。

当麻に魔術の事を問うのも考えはしたが…。あいつが教えてもらうまで今日のご機嫌は秘密にしよう。

いつか…。あいつが俺に話してくれるまで…。

さて、何をしようか…。

「やっと見つけたわよ！人がせつかくおごってやるってのにさっさと帰っちゃうなんてヒドくない!？」

御坂に見つかり、忘れていたことを思い出す。

『あ、その…。えっと…。すみません』

そこには中学生に頭を下げて誤る高校生がいた。もちろん俺だ！

「えっと…。なんかビルの倒壊にまきこまれたみたいだけどケガとか…なかった？」

わずかに何故知っているのかっという疑問が生まれたが問うのすら怖かった。

『あ…。肩をやれた…』

もう一つ忘れていたことがあった。

左肩をナイフでやられてはいないが自分の力で内部から血を飛び出したことで左肩を怪我している。

まあ、能力で止血もしてるし大丈夫だろうっと思っただが。

「大変じゃない！病院いくわよ」

中学生に右手をつかまれ連行されていく高校生の姿があった。まあ、

俺だ！

悪い気はしなかった。

御坂と関わる事が日常になっていく。それも楽しい事だ。

何も拒むことなんて無い。俺の日常は楽しい日々へと変わっていくのだから。

夏が終わっても、秋が来ても……。この楽しい日々が続くように俺は心の中で祈った。

夏の終わり（後書き）

夏の始まり（？）の7月で8月が終わる物語。

ここで一旦この物語を終わります。

最後までありがとう！

この作品の続編を期待している方がいれば悪いけどそんな予定はない！

まあ、気分ですハイ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9348m/>

とある科学の水使い

2011年7月1日13時09分発行